第五編　文　化

第一章　文　化

市民一人一人が文化の担い手として、特色ある文化の創造を目指して文化振興に努めることは、豊かな心と地域に根ざした市民文化の醸成につながる。子どものころから多様な文化芸術にふれ、親しみ、体感できる環境の中で育つことが創造力豊かで、感動する心をはぐくむ。優れた文化芸術に身近で接することができるよう文化施設の充実や活用を図りながら、文化活動を支援していく体制づくり、文化をはぐくむ人材の育成は一層重要性を増している。

Ⅰ　文化振興

鹿児島市は平成8年度の教育行政の基本目標の一つに「歴史や自然を生かした個性豊かな市民文化の創造」を掲げた。14年度には「地域に根ざした市民文化の創造」と、文言は変わったが、文化振興（基盤整備と活動促進）と文化財の保存・活用を柱にしていることに変わりはない。昭和28年にスタートした市民文化祭は毎年9月から12月にかけて開催しており、いけばなや邦楽演奏、オペラなどさまざまな催しを通して日ごろの成果を披露しあう。25年度は14団体９０５９人が参加した。児童生徒を対象にした芸術鑑賞事業は子どもたちの表現力の向上だけでなく、地元の文化団体の育成にも効果を上げている。郷土の文化資産の素晴らし

さを再認識してもらうことは郷土愛を高めるばかりでなく、地域活性化策としても役立つ。鹿児島市は郷土芸能保護のための助成を行う傍ら、ふるさと芸能祭を開いて民俗芸能に市民が触れる機会の提供に努めている。

国民の日頃の文化活動の成果を全国的な規模で発表する国民文化祭の第30回大会は27年10、11月に鹿児島県で開かれる。テーマは「本物。鹿児島～文化維新は黒潮に乗って～」で、鹿児島市では吹奏楽の祭典、マーチング・バトントワーリングの祭典、合唱の祭典、大薩摩焼展、本場大島紬フェスティバル、大正琴の祭典、能楽の祭典、現代劇の祭典、ダンススポーツフェスティバル、ティーンズアートフェスティバル、小倉百人一首かるた競技全国大会、洋舞フェスティバル、オペラの祭典、オーケストラの祭典の開催が決まっている。

椋鳩十児童文学賞

昭和62年に死去するまで旺盛な創作活動を続けた椋鳩十氏が残した功績をたたえ、児童文学の発展に寄与するため、鹿児島市は平成2年、椋鳩十児童文学賞を創設した。市制１００周年記念事業の一つで、新人の児童文学の刊行本（第20回までは初刊行本のみ、第21回からは2作目まで）を対象にしている。審査員はタカシヨイチ氏ら4人。応募者は広く全国にまたがり、次代を担う児童文学作家の登竜門的な役割を果たしてきた。多彩な顔ぶれの受賞者の中には後に直木賞を受賞した森絵都氏もいる。（第

椋鳩十児童文学賞

第１表　椋鳩十児童文学賞受賞作品・受賞者一覧　（敬称略）

回	受賞作品	受賞者	応募数
第１回	お引越し	ひこ・田中	51
	DownTown通信〜友だち貸します	石原　てるこ	
第２回	リズム	森　絵都	43
第３回	パパにあいたい日もあるさ	もとやま　ゆうほ	32
第４回	ちいさい　えりちゃん	村山　早紀	41
第５回	海にむかう少年	にしざき　しげる	44
第６回	泣けない魚たち	阿部　夏丸	54
第７回	ぼくのフェラーリ	坂元　純	64
第８回	バイ・バイ－11歳の旅だち－	岡沢　ゆみ	52
第９回	ビート・キッズ－Beat Kids	風野　潮	44
第10回	ナシスの塔の物語	みお　ちづる	45
第11回	天のシーソー	安東　みきえ	52
第12回	おれんじ屋のきぬ子さん	河俣　規世佳	72
第13回	寿司屋の小太郎	佐川　芳枝	68
第14回	人形の旅立ち	長谷川　摂子	58
第15回	雪の林	やえがし　なおこ	41
第16回	走れ、セナ！	香坂　直	45
第17回	冬の龍	藤江　じゅん	40
第18回	ボクシング・デイ	樫崎　茜	49
第19回	ひらがな だいぼうけん	宮下　すずか	41
第20回	ぼくとあいつのラストラン	佐々木　ひとみ	35
第21回	ピアチェーレ 風の歌声	にしがき　ようこ	41
第22回	むこうがわ行きの切符	小浜　ユリ	31
第23回	山の子みや子	石井　和代	37
第24回	かさねちゃんにきいてみな	有沢　佳映	25

1表参照）文学賞の20回を記念して22年度にはジュニア文芸賞も企画された。「私の心にある〝感動〟」をテーマに、小・中・高の3部門に全国から651点が寄せられ、優秀賞には坂井敏法君（新潟市立万代長嶺小4年）、桑木栄美里さん（鹿児島市立甲南中1年）、上栗美鈴さん（鹿児島市立鹿児島女子高1年）が選ばれた。20回記念では、鹿児島市立図書館の開設20年も兼ねて、椋鳩十氏の孫・久保田里花氏と19回の受賞者・宮下すずか氏を招いたトークショーも開かれた。副賞は200万円でスタートしたが、23回から100万円とし、24年度から受賞者と市内の小中学生との交流会を開催した。24回までの累計の応募は1105点で、12回の72作品が最高でその後減少傾向が続いた。背景には少子化の影響などで児童文学出版自体が低調になったことがある。加えて、地元作家の受賞がないこともあり、長年にわたる実績の積み上げにより、事業の目的を達したとして、26年度の24回を最後に本文学賞は終了した。また「子どもたちに聞かせたい創作童話」の原稿も全国から募集しており、25年度で35回を重ねた。

五色の花コンサート

新しい鹿児島市の誕生を記念して「五色の花コンサート」が平成17年に始まった。合併によって活用されていない各支所の議場を有効活用し、地域の人々に優れた音楽を楽しんでもらうのが狙いで、5つの町の町花にちなんで命名された。毎年、市内を拠点に活動する声楽家や演奏者によるプログラムが5地域で開催されてきたが、24年度までで終了した。

文化薫る地域の魅力づくり

文化の振興を図ることで元気な地域づくり、人づくりを進めようと、平成24年3月「文化薫る地域の魅力づくりプラン」を策定した。同プランは、第五次鹿児島市総合計画に掲げられたプロジェクトを具体化したもので、5カ年計画で美術・音楽・地域伝統芸能の3分野を柱に、文化を盛り上げる人と体制づくり、文化

資源の継承発展、まちづくりへの活用やまちの魅力の情報発信につなげることを狙った。5月には27人の委員から成る実行委員会を設立、部会ごとに事業の本格実施に向けた準備や検討を進めた。

「文化薫るかごしま」の始まりを告げる記念イベントは24年11月に鹿児島中央駅アミュ広場での「アートセッションKAGOSHIMA」で、ジャズピアニスト山下洋輔さんのコンサートを開催した。県政記念公園では「想いつながる夕べ　あかり×音楽×伝統芸能」が開かれ、ブラスバンド演奏や伝統芸能に加えて明かりをテーマにした作品が展示され、光に照らされた風船が雰囲気を盛り上げた。25年度は8月に、情報の発信と活動拠点になる「かごしま文化情報センター」（KCIC）を市役所のみなと大通り別館にオープンさせた。インターネットを使った情報発信やワークショップ、トークセッションの場としても活用する。10月には3分野の要素を盛り込んだ「音とあかりの散歩道」が市立美術館前庭などで開かれた。また、地域での音楽と民俗芸能のイベントや、文化ホール等の施設の空き時間を利用し、芸術文化活動を行う団体に練習場所の活動拠点として一定期間無料で提供する取り組みを開始した。

アートセッションKAGOSHIMA

大桜島公募展

大正大噴火から100周年を迎えるのに先立ち「大桜島公募展」（同実行委員会主催）が平成24年10月12日から11月4日まで、鹿児島市立美術館とかごしま近代文学館で開かれた。郷土のシンボル・桜島の情景や

イメージした作品を平面（絵画など）、写真、文芸（フォト俳句）の3部門で全国から募ったところ、合計860点が集まった。最高賞の桜島大賞には平面部門で齊藤隆氏（東京都）、写真部門は北山毅氏（姶良市）、文芸部門で上野洋子氏（鹿児島市）が輝いた。来場者はさまざまな視点、心象で描写された多様な桜島から新たな魅力を発見していた。

文化振興アドバイザー

鹿児島市は26年4月、市民協働による文化振興の取り組みを促し、文化振興を通じた元気な地域づくりと人づくりを実現するため、市民文化部内に文化振興アドバイザーを配置した。国民文化祭の開催に加えて、市制125周年と合併10周年が間近に迫ったことが背景にあり、行政の枠にとらわれない発想、視点から助言をもらうことで、イベントなどの成果を高めようとの狙いだ。鹿児島県マーチングバンド連盟の新福憲一理事長に委嘱した。

Ⅱ　文化施設の充実

鹿児島市立科学館　鹿児島市立科学館(鴨池2丁目、愛称ビッグアイ)は鹿児島のシンボルともいえる火山、ロケットなどを柱に据え、自然界の法則や科学技術、宇宙をわかりやすく紹介することを目的に平成2年にオープンした。市立図書館との複合施設で科学館は地上6階建て、延べ床面積は5981平方㍍になる。2階がエントランスホールで、3、4階が展示ゾーン、5、6階は宇宙劇場となっている。感動的な出会いと体験を通して、夢と創造性をはぐくむとともに、科学知識を得られることを目指した。宇宙劇場の直径23㍍の巨大スクリーンに映し出される大型全天周映画（ドームシネマ）やプラネタリウムの映像は子どもたちに

人気がある。プラネタリウムは、19年に装置を一新して約1千万個の星を映し出す光学式プラネタリウム投影機を導入し、併せて高解像度できめ細かい美しい映像を映し出すレーザープロジェクターによって、より立体感や臨場感を味わえるようになった。知的感動発信基地をキャッチフレーズに、大々的なリニューアルは9年、16年、25年とこれまで3回行った。直近の改装では「もっと科学が面白くなる、もっと鹿児島が好きになる」をテーマに、地球の構造や活動、桜島をはじめ鹿児島の魅力を楽しく学べる「地球の科学」、天文や宇宙技術を紹介し宇宙へのイメージが広がる「宇宙の科学」、科学の不思議や面白さを楽しく体感できる「サイエンスラボ」の3ゾーンに大別し、参加者と一緒に科学の不思議を楽しみながら学び、体験する施設に模様替えした。飲食コーナーやキッズスペースを新設したこともあり、子どもたちはもとより、家族連れがゆっくりと一日を過ごしている。

25年5月には総入館者が300万人を突破した。年間利用者はリニューアル前の23年度は12万113人だったのが、リニューアル後の25年度は15万9681人となった。宇宙劇場を活用した多彩な講演・イベント、気軽に参加できる科学劇場やだれでも工房など独自企画のほか、青少年のための科学の祭典、鹿児島高専の日、おもちゃ病院、コズミックカレッジ、AMラジオ工作教室など、JAXA（宇宙航空研究開発機構）

鹿児島市立科学館

を含め他団体との共催事業にも力を入れ、幅広い集客に努めている。

かごしま近代文学館・かごしまメルヘン館　城山のふもと、鶴丸城跡の一角に平成10年1月29日に、鹿児島市の文学の振興を担い、文化の向上を目指す複合施設が開館した。向田邦子ら鹿児島にゆかりのある作家を中心に、遺品、遺墨、初版本、直筆原稿を展示し、鹿児島とのかかわりや作品世界などを紹介する「かごしま近代文学館」と、世界の童話・民話などを人形や映像等で演出する「かごしまメルヘン館」からなり、地下1階、地上3階の建物は延べ床面積5874平方㍍。近代文学館は鹿児島にゆかりの深い海音寺潮五郎、林芙美子、椋鳩十、梅崎春生、島尾敏雄、向田邦子の6人の作家の業績や作品世界をジオラマや文学資料、遺愛の品々を通じて紹介するコーナーや有島三兄弟ら22人の作家の業績を紹介する「鹿児島文学の群像」、文学サロンなどを設けた。世界の童話を多面的に楽しんでもらうことを意図したメルヘン館では、体験型の不思議の卵が目を引く。２００人収容のホールや自由に本を閲覧できるライブラリーや親子読書コーナーも備えており、両館を合わせ事業費は約65億円をかけた。しかし、開館から10年を経過したことを機に、展示物等に変化がなく、常設展示の観覧者数が伸び悩んでいることや九州新幹線全線開通後、観光客の増加が見込まれることから、利用者のさらなる拡大を図り、両館を観光資源として活用する観点からリ

かごしま近代文学館・かごしまメルヘン館

ニューアルが検討された。22年度に5億円近くをかけて両館の展示施設の全面改修を行った。文学館では、幅広い世代が魅力を感じる施設とするため、展示室「向田邦子の世界」を新設したほか、「文学アトリエ」など、体験するコーナーの充実を図った。メルヘン館では、わくわくスタジオ、おはなしのまちやおはなしの散歩道、絵本のお城など、映像やトリックアート、ミニアスレチックといった体験型展示を通して、親子でお話の世界や絵本に親しめる空間づくりを目指した。23年3月に再オープンした後の3カ月間で両館の入館者は改装前の同時期の6割増しとなり、5月には開館14年目で200万人を突破した。文学館では文学講座や短歌教室などが開かれ文芸愛好家の拠点にもなっている。メルヘン館が開くわらべうた教室やワークショップ、おはなし会は親子連れを楽しませている。

ふるさと考古歴史館　「地中の宝」を主テーマに「ふるさと考古歴史館」が平成9年4月17日、下福元町の鹿児島営林署跡地にオープンした。鉄筋2階建てで延べ床面積は約3千平方㍍、古代から近世までの資料約700点を実物中心に展示する。目玉は下福元町で発掘され、縄文時代草創期の集落跡として注目を集めた掃除山遺跡（第二章文化財を参照）を国内最大級のジオラマで復元したこと。遺跡や出土品は最新のマルチメディア機器を駆使して解説し、天保年間の鹿児島城下図を背景に当時と今の市街地を見比べることがで

ふるさと考古歴史館

きるなど、視覚効果を狙った。屋外には古代住居ゾーンもあり、勾（まが）玉や土器などが作れて、火おこしも体験できる。目標は市民に親しまれる歴史学習施設で、開館14年目の23年5月、入場者は１００万人を突破した。25年には特別企画展「火を噴く山の記憶―遺跡が語る火山と人々の歴史」を開くなど企画展にも力を入れている。

鹿児島市立美術館　昭和29年、城山町に開館した鹿児島市立美術館は九州における公立美術館の中で一、二を争う歴史を持つ。しかし、近代美術館として幅広い活動を展開するには手狭になったため、従来の施設を解体して再生を図ることになり、60年10月に新美術館を建設し、鹿児島市の文化ゾーンの核にふさわしい殿堂が開館した。①地元関係作家の作品②西洋美術の印象派以降、現代に至る流れを概観する作品③郷土の風土に取材した作品―という3つの柱を立てて意欲的な収集活動によって、平成26年3月末で６０８１点とコレクションの充実が図られ、観光都市・鹿児島の顔としても一定の評価を得ている。（第2表参照）しかし、こうした方針に基づく収集を円滑に進めようにも、従来の単年度予算に従った美術品購入では予算枠に縛られ、タイミングを逸して入手し損ねかねないため、21年度に美術品等取得基金を創設し、初年度3億円を計上した。23年度には基金を利用して地元出身の木版画家、装丁家・橋口五葉の代表作「黄薔薇」などを購入した。（第3表参照＝平成以降、海外派遣留学生作品を除く）ほかに遺族らからの寄贈が23点もあったのは市民の美術館として認知されているからだろう。

郷土関係作家と西洋美術に関する特別企画展を毎年各1回ずつ開催する方式も確立した。平成以降で2万人以上が鑑賞した企画展を列挙すると、親と子でみる世界の名画展、彫刻の詩人ザッキン展、海老原喜之助

展、芸術と自然展、語りかける不思議な彫刻マリソール展、輝く色彩と愛の世界シャガール展、ジョルジュ・ブラック回顧展、パリ、プティ・パレ美術館展、ミレーとバルビゾン派の作家たち展、世界遺産ポンペイ展、黒田清輝展、佐伯祐三とパリの時代展、ピエール・ボナール展、ベルギー象徴派展、ルーベンスとブリューゲルの時代展、イタリア美術とナポレオン展、ピカソと20世紀美術の巨匠たち展、田中一村　新たなる全貌展、ラファエル前派からウィリアム・モリスへ展、ナント美術館名品展―がある。美術講座・講演会や小企画展などにも精力的に取り組んでいる。年間の入館者は平均で15万人を超えている。

鹿児島市民文化ホール・谷山サザンホール　大・中・小3つのホールを持つ鹿児島市民文化ホール（与次郎2丁目）は老朽化に加えて、年々多様・高度化する演出技法に対応するため、昭和58年の開館以来、初の

第2表　鹿児島市立美術館の収蔵品内訳

（平成26年3月末現在）

分類			収蔵品		
			日本	外国	合計
美術品	日本画		119	0	119
	油彩画		354	28	382
	水彩・素描		2,515	5	2,520
	版　画		293	581	874
	彫　刻		39	10	49
	空間造形		1	0	1
	工　芸	陶　芸	227	10	237
		木金工	16	0	16
		ガラス	26	0	26
		その他	4	0	4
		小　計	273	10	283
	書籍		27	0	27
	書		51	0	51
	合　計		3,672	634	4,306
資　料			1,768	7	1,775
総　計			5,440	641	6,081

第３表　平成以降の市立美術館の購入作品一覧(海外派遣留学生作品を除く)

年度	作者名	作品名	分類
平成元年度	伊牟田経正	渇（かわき）	油彩画
	伊牟田経正	仮面	油彩画
	海老原喜之助	浴後	油彩画
	鯨津政男	自画像	油彩画
	堀之内一誠	卓上のヴァイオリン	油彩画
	堀之内一誠	ボン風景	油彩画
	和田英作	田園の夕暮れ	油彩画
	パブロ・ピカソ	女の顔	油彩画
	橋口五葉	雪の伊吹山	版画
平成２年度	木村探元	富士春景図（道本賛）	日本画
	安達真太郎	静物（白桃）	油彩画
	上石田哲夫	尾道（小春日和）	油彩画
	山口長男	構成（赤）	油彩画
	ラウル・デュフィ	ベルト・レイズの肖像	油彩画
	ヴィクトル・ヴァザルリ	ヴァンクーバー	版画
	ジム・ダイン	冬の９つの情景Ⅵ・Ⅶ	版画
	ジム・ダイン	西海岸の赤いダンサー	版画
	オシップ・ザッキン	オルフェ	彫刻
	中村晋也	ＭＡＥ嬢	彫刻
平成３年度	江口暁帆	桜島・天保山・磯山図	日本画
	木村探元	雉子図	日本画
	木村探元	破墨山水図	日本画
	木村探元	秋の洛山と人物	日本画
	マックス・エルンスト	石化せる森	油彩画
	アンドレ・ドラン	シャンブールシの風景	油彩画
	サルバドール・ダリ	マルドロールの歌	版画
	マックス・エルンスト	博物誌	版画
平成４年度	オディロン・ルドン	オフィーリア	油彩画
	ジュール・パスキン	ソファに座るマルセル	油彩画
	ルーチョ・フォンターナ	空間概念〈期待〉	油彩画
	アンドレ・ボーシャン	森に棲む動物達	油彩画
	山口長男	作品Ｂ	油彩画
	オディロン・ルドン	聖ヨハネ黙示録	版画
平成５年度	村永定観	県鳥花	日本画
	サルバドール・ダリ	三角形の時間	油彩画
	海老原喜之助	サーカス	油彩画
	ジャン・デュビュッフェ	夢遊病者	版画
	アルベルト・ジャコメッティ	終わりなきパリ	版画

年度	作者名	作品名	分類
平成６年度	平山東岳	風竹図	日本画
	平山東岳	松図	日本画
	カミーユ・ピサロ	ポントワーズのレザールの丘	油彩画
	黒田清輝	雪景	油彩画
	東郷青児	彼女のすべて	油彩画
	アンリ・マチス	ジャズ	版画
平成７年度	吉井淳二	女達	油彩画
	マリー・ローランサン	マンドリンのレッスン	油彩画
	ワシリー・カンディンスキー	二つの黒	油彩画
	ワシリー・カンディンスキー	小さな世界	版画
	ワシリー・カンディンスキー	響き	版画
平成８年度	モーリス・ユトリロ	ブリ・シュール・マルヌの教会	油彩画
	海老原喜之助	貨物船とヨット	油彩画
	東郷青児	コルの村はづれ	油彩画
	中川一政	桜島	油彩画
	加山又造	桜島	日本画
	マリノ・マリーニ	小さな騎手	彫刻
	マリノ・マリーニ	「春の祭典」の登場人物たち	版画
平成９年度	フランク・ステラ	より誤謬少なき鯨図２×	油彩画
	黒田清輝	入江の黄昏	油彩画
	藤島武二	潮岬風景	油彩画
	フランク・ステラ	ブラック・シリーズⅠ	版画
	フランク・ステラ	シンジェリ・ヴァリエーションズ	版画
平成10年度	ジャン・デュビュッフェ	都会脱出	油彩画
平成11年度	アンディ・ウォーホル	多色による４つのマリリン	油彩画
	和田英作	公園風景	油彩画
平成12年度	木村探元	雲龍図	日本画
	野津無人相菩薩	楊柳観音図	日本画
	アレキサンダー・アーキペンコ	すわる女	彫刻
平成13年度	藤島武二	鳥羽の日の出	油彩画
平成14年度	黒田清輝	湘南風景	油彩画
	和田英作	マダム・シッテル像	油彩画
	和田英作	夕暮（グレー）	油彩画
	藤島武二	ピサネルロ〈ジネヴラ・デステの肖像〉模写	油彩画
	海老原喜之助	自画像	油彩画
	海老原喜之助	裸婦	油彩画
	海老原喜之助	松林	油彩画
	山口長男	形象（かたち）	油彩画

年度	作者名	作品名	分類
平成14年度	東郷青児	裸婦	油彩画
平成15年度	東郷青児	椅子	油彩画
平成16年度	藤田嗣治	座る女性と猫	油彩画
平成17年度	ジョルジュ・ルオー	聖顔	油彩画
平成18年度	ヴェナンツォ・クロチェッティ	水浴のあと体を拭く女	彫刻
	香月泰男	桜島	油彩画
平成19年度	ジャン・フォートリエ	雲竜図	油彩画
平成23年度	橋口五葉	黄薔薇　他に20点	日本画
	橋口五葉	孔雀と印度女　他に10点	油彩画
	橋口五葉	ベゴニア　他に114点	水彩・素描
	橋口五葉	此美人　他に5点	版画
平成24年度	曽宮一念	南岳爆発	油彩画
	海老原喜之助	裸婦　他に1,004点	水彩・素描
平成25年度	青山義雄	桜島	油彩画
	海老原喜之助	晴れ着	油彩画
	黒田清輝	大磯鳴立庵	油彩画

舞台設備改修を平成18年度から20年度にかけて段階的に行い、22年度には空調設備も一新した。舞台照明や音響、機構設備を取り換え、デジタル化したことで機能性も向上した。改修前後の利用率で比べると、第1ホールで64％だったのが76％に、第2ホールの71％は75％に向上している。自主文化事業は年に3～4回程度行っており、第1ホールでは新日本フィルハーモニー交響楽団（8年度）、ロシア国立ワガノワ・バレエ・アカデミー（10年度）、プラハ国立歌劇場のプッチーニ「トスカ」（15年度）、第2ホールではミュージカル「アイ・ガット・マーマン」（14年度）などが好評だった。８００席のホールを備える谷山サザンホール（谷山中央1丁目）は谷山地区の文化・コミュニティ活動の中核施設として定着しており、利用率は60％前後で推移している。舞台照明設備は23年度に改修した。年に1、2回、自主文化事業を実施しており、吉田正記念オーケストラin鹿児島（21年度）などが好評だった。

かごしま教育文化振興財団

平成９年12月、かごしま近代文学館・メルヘン館、科学館を管理するため設立された財団法人鹿児島市教育施設管理公社は、23年４月、鹿児島市民文化ホール管理公社を吸収合併し、名称を財団法人かごしま教育文化振興財団に変更した。ふるさと考古歴史館、谷山サザンホールを含めてこれら６つの文化施設の管理運営のほか、教育、学術、芸術文化及び生涯学習活動に関する各種の事業を行い、個性豊かな市民文化を創造することを事業目的に掲げる。25年４月には公益認定を受け、公益財団法人に移行した。

西郷南洲顕彰館　全国からの寄付により上竜尾町に建設され、昭和53年に鹿児島市に寄贈された西郷南洲顕彰館は開館から32年が経過し、老朽化が進むとともに展示内容が古びてきたため、平成22年４月、改装に踏み切り、展示方法も改善してリニューアルオープンした。西郷隆盛の逸話を紹介するパネルを製作し、資料を映像化して見せる工夫も施した。初公開の肖像画や書簡など１００点を展示している。一方でエレベーターを新設、内装や空調・照明も一新しており、常設展示だけでなく、ミニ企画も開ける環境が整った。南洲翁や西南戦争について学ぶ南洲翁遺訓学習会を年９回開くほか、敬天愛人の教えを受け継いで世界に羽ばたく人材育成を目指して、14年に平成集義塾も創設した。館の管理は公益財団法人・西郷南洲顕彰会が行っている。

黎明館

県などの施設　明治１００年を契機に建設された鹿児島県歴史資料センター黎明館（城山町）は平成８年、「わかりやすく、楽しく、親しめる」をモットーに大規模なリニューアルを行った。昭和58年のオープンで展示に老朽化と陳腐化が目立つようになったためである。昭和初期の天文館を再現したジオラマや鶴丸城、出水の武家屋敷などの大型でシンボルとなる模型を導入する一方で、祭りの面や昔の玩具、鎧兜（よろいかぶと）を実際に身に着けたり触ったりできる体験学習室を設けた。利用者の理解を助けるため、解説システ

ムを設置する傍ら展示解説員も配置し、データベース化した収蔵資料を手軽に検索できるようにもした。二度、三度と市民が足を運んでくれる文化施設には欠かせないからだ。開館25周年記念として20年にはＮＨＫ大河ドラマで話題になった天璋院篤姫を紹介する特別展を開催して大勢のファンを呼び、23年4月には開館以来の利用者が４００万人を突破した。前庭には24年12月に天璋院の青銅像も建立された。

鹿児島県文化センター

鹿児島県文化センターは平成8年に、昭和41年の開館以来2回目となるホールの床板の張り替えと冷暖房機器の総入れ替えを行った。平成18年4月には日置市の酒造会社が命名権（ネーミングライツ）を取得し「宝山ホール」の愛称が付いた。県内で初の試みは年間2千万円で5年の契約。厳しい県の財政事情のなか、新たな財源確保策として踏み切った。23年に契約は更新された。

私立美術館

昭和60年から平成元年に相次いで鹿児島市に誕生した私立美術館は、立地環境とも相まって落ち着いた雰囲気で芸術に親しめると、市民に歓迎された。大嵩禮造（おおたけれいぞう）や海老原喜之助コレクションが光彩を放つ児玉美術館（下福元町）、海老原ら郷土作家に加えて長太郎焼などの陶磁器も豊富な三宅美術館（谷山中央1丁目）、眺望が自慢で企画展にも意欲的な長島美術館（武3丁目）はファンも少なくない。9年4月には松元町（現石谷町）に中村晋也美術館が開館した。文化勲章受章の彫塑家がアトリエにしていた土地で、60年以上にわたる創作の足取りをたどれる構成になっている。20年には全国各地に立つ中村氏制作の銅像の巨大なブロンズ原型展示室も増設された。眼科医・井後吉久氏の三十数年にわたるコレクションを展示する陽山美術館は山下町に11年4月オープンした。市街地のビルの5階にあって展示スペースは70平方㍍とやや小規模だが、海老原喜之助や和田英作、平野遼、セザンヌら多彩な作品に接することができる。

Ⅲ　文化活動

「動く」をテーマに、21世紀の日本と鹿児島の文化のグランドデザインを考える日本文化デザイン会議が平成11年10月29日から3日間、鹿児島市を主会場に開催された。日本文化デザインフォーラム（黒川紀章代表＝当時）が全国の中核都市で地域に根差したテーマに新たな視点を加えて論議し、情報発信してきたもの。第22回となった「'99鹿児島」には文学、音楽、建築、哲学とあらゆる分野の第一線で活躍する約１２０人の講師が結集して31のシンポジウムなどを通して熱く語り合った。開会式では日本文化デザイン大賞を贈られた映画監督・北野武氏のトークショーがあり、ザビエルの生涯を描いた戯曲「フランシスコ・X」の上演、講師が学校を訪問する特別授業などもあって盛り上がった。変化の時代にあって、未来を予言する集団からの課題提起と提言は市民の知と心を大いに刺激した。小説「桜島」は戦争文学の傑作と言われながらも、その舞台、タイトルにもなった桜島には作品を想起させる手がかりがなかった。そんな状況を嘆く市民の呼びかけが契機となって18年8月、梅崎春生文学碑が桜島横山町の溶岩なぎさ公園に建立された。

郷土の文化的土壌を耕し、新しい花を咲かせた人々、団体に贈られる顕彰制度には、古い順から並べると、南日本文化賞（昭和25年創設）、県民表彰（28年同）、ＭＢＣ賞（43年同）、南日本文学賞（48年同）、南日本出版文化賞（50年同）、鹿児島県芸術文化奨励賞（52年同）、かぎん文化財団賞（平成10年同）があり、それぞれの選考基準にのっとり、優れた業績を上げた人物、あるいは地域社会に溶け込んで献身的努力を重ねた人々に光を当て、励ます役割を果たしている。

顕彰制度

鹿児島市芸術文化協会

鹿児島市に芸術文化の輪を広げてきた鹿児島市芸術文化協会（芸文協）は平成24年に創立40周年を迎えた。鹿児島市民文化会議と称していた時代から、芸術文化の環境づくりに対するご意見番的役割を果たしてきたばかりでなく、ジャンルや世代の垣根を越えて芸術を語り、連携を深める役割を果たしてきた。なかでも、鹿児島市教育委員会との共催で昭和50年に始まった鹿児島市春の新人祭は春の新人賞と名前を変え、有能な若い芸術家を市民に紹介する仕組みとして高く評価されている。受賞者は平成25年の39回までで１５９人に上り、郷土に貴重な潤いをもたらす人材として活躍している。30回を記念して16年度に始まった芸術家派遣プロジェクトの礎にもなっている。派遣は25年度までに市内の延べ２４１校で８千人近い児童生徒に芸術体験活動を行っている。17年には芸文協会員が中心になってＮＰＯ法人・かごしまアートネットワークが設立され、芸術家派遣プロジェクトや五色の花コンサートの運営を担っている。一方で14年からジャンルを越えた交流の場としてフォーラムを毎年、定期的に開いてきたが、運営方法などをめぐって休止している。24年５月に会報は１００号を越えた。会員は次の28団体と個人が97人いる。

鹿児島県美術協会、鹿児島自然美画会、鹿児島県書道会、鹿児島県写真協会、日本リアリズム写真集団鹿児島支部、鹿児島オペラ協会、鹿児島交響楽団、鹿児島作曲協会、鹿児島県箏曲会、鹿児島県尺八連盟、生田流箏曲彌生会、鹿児島筑紫会、桐の音楽院、錦翔流大正琴、琴城流大正琴振興会鹿児島県支部、鹿児島謡曲連合会、天吹同好会、アソカバレエ研究所、白鳥バレエ、鹿児島バレエ研究所、日高千代子バレエスタジオ、有川泉バレエアカデミー、鹿児島演劇協議会、茶道裏千家淡交会鹿児島支部、表千家同門会鹿児島県支部、鹿児島県連合華道会、鹿児島市民劇場、鹿児島市子ども劇場連絡会

文芸・出版　南九州の文学振興と新人発掘を願って昭和48年に創設された南日本文学賞は当初、前年に文芸同人誌や単行本として発表された創作、評論、詩を対象に選考していた。同人誌離れが進むなか、門戸を広げる狙いで、平成10年度の27回から公募制に切り替わった。12年度には小説に限定して南日本文学賞大賞を創設、審査員による選考過程を一般来場者が見守るなかで行う全国でも珍しい公開選考が始まった。18年度からは小説・文芸評論と詩に分けて募集、表彰するようになり、南九州在住か出身者に限っていた募集枠は、題材が南九州から奄美諸島であれば応募を認めることになった。受賞を機に活躍の場を広げたり、創作意欲をかき立てたり、後進の育成に尽力するようになった作家・詩人は多い。

総合文芸誌「文芸かごしま」は行政が主体になって33年間、毎年すぐれた作品を収載することで文学活動を支え、鑑賞を促してきたが、18年に無期限の休刊が決まった。県から県文化協会に編集・発刊が移管されて丸2年、県財政がひっ迫したため補助金が16年に打ち切られては、いかんともしがたかった。

「女と刀」で田村俊子賞を受賞した中村きい子氏が平成5年に出版した第2作「わがの仕事」は27年ぶりの作品ということもあり、話題になった。文学不毛の地ともいわれる鹿児島にあって、阿久根星斗氏ら南日本文学賞受賞者と九州芸術祭文学賞鹿児島地区優秀賞受賞者の計9人で「小説春秋」が6年11月に創刊され、発表の場を広げた。9年4月には鹿児島を活気づける一灯にと文芸誌同人や詩人、出版関係者が集まって鹿児島ペンシルクラブを旗揚げした。作家の講演や創作談義、文士劇など趣向を凝らした例会を開きながら、書く意欲を燃え立たすことを目指す文学サロンに育っており、25年に１００回を重ねた。一方で同年、異色の文芸同人誌「カンナ」が3月発行の１４３号で42年の歴史を閉じた。10年には相星雅子、出水沢藍子、小

沢聖子ら7氏は「鹿児島の女性作家たち」を出版し、筆を競う一方で、朗読による表現を試みる碧の会も結成した。鹿児島市出身の梨木香歩氏の「西の魔女が死んだ」は7年に第44回小学館文学賞に選ばれ、のち映画化もされた。

短歌

鹿児島のみならず、全国にも支部を広げた鹿児島市の短歌結社・錦江社（主宰・鶴田正義）が平成2年、芸術文化部門の地域文化功労者として文部大臣表彰された。このころには歌誌「にしき江」の支部は全国45に広がり、会員1300人を超す結社に成長した。しかし、その後は会員の高齢化が進むにつれ、会員数は半減、正義主幹が亡くなるなど存続の危機にも見舞われたが、26年5月に全国的にもまれな創刊100周年を迎え、通巻も1134号に達した。出版社ジャプランが13年に出した「現代鹿児島短歌大系」全12巻は南日本出版文化賞を受けた。有望な新人に贈られる角川短歌賞の第51回（17年）に選ばれたのは森山良太氏で歌誌「華」の同人でもある。鹿児島県歌人協会が中心になって20年に始まった「まごころ青春短歌大会」は中・高校生らから2万首が寄せられるまでに育っている。春秋2回開かれる南日本短歌大会は25年で106回を数えた。県歌人協会には「華」「南船」「にしき江」「山茶花」「黎明」「鹿児島アララギ」「鹿児島水甕（みずがめ）」「コスモス鹿児島」が加盟する。26年、鹿児島市立吉野中学校はNHK全国短歌大会ジュニアの部で3人が百人一首賞、7人が入選して、学校大賞に輝いた。

俳句

俳句の世界で芥川賞に匹敵する現代俳句賞を平成2年の第37回に受賞したのは鹿児島の俳誌「天街」の創設同人である国武十六夜氏だった。作句力はもちろん、将来性も考慮して選ばれる賞を獲得したのは鹿児島県では2人目である。流派を超えて、研さんと交流を重ねてきた鹿児島県俳人協会は24年11月に設立50周年

を迎え、記念の合同句集「海紅豆」を出した。5年ぶりの刊行で第12集に当たる。俳句ブームのおかげもあって、かつてはひしめくように結社がつくられ、5年ごろは鹿児島市に本部もしくは支部がある俳誌に限っても17を数えた。だが、同人の高齢化が進むにつれ、活動を縮小する例が相次ぎ、県俳人協会に参加する結社は25年現在「河鹿」「草の花」「形象」「ざぼん」「火の島」「空」「天街」「橡（とち）」「郁子（むべ）」「天日」「若葉」「湾」の11となっている。結社の持ち回りで春秋2回開く南日本俳句大会は間口拡大への期待を込め、14年に若手に贈る奨励賞を新設した。各結社が後継者を育てながら発行を続けていくことの意義は大きい。吟（ぎん）行や錬成会などで切磋琢磨（せっさたくま）しながら、それぞれが師匠から受け継いだ伝統をどう個人の作品に生かしていくかも課題である。

薩摩狂句・川柳

鹿児島の方言を自在に操って五・七・五におさめる薩摩狂句は、機知と郷土色にあふれた文芸として愛好者が多い。同人誌には「渋柿」や「さんぎし」「にがごい」があり、年2回の南日本薩摩狂句大会など活気に満ちている。MBCやNHKの番組も定着、新聞紙上の投稿も活発で、新たな層を開拓している。

川柳は三條芳文氏らの指導で、かつての「川柳不毛の地」という汚名を払しょくした。同人誌には「雑草」「火のしま」「はまゆう」があり、南日本川柳大会のほかに南日本女流川柳大会、鹿児島県新人川柳大会も回を重ねている。

詩

平成元年10月、鹿児島県詩人協会が発足した。孤高の作業に没しがちな分野だが、詩壇の活性化のためには互いの交流、親ぼくを深めることも大事と結束し、合同詩集・鹿児島県詩集の刊行にも尽力する。5年には第16回山之口獏賞が詩誌「地点」同人の主婦、山中六氏（当時吉田町佐多浦）に決まった。第一詩集「見

えてくる」が「ユーモアとウイットに富み、構成力もある」と評価された。17年には高岡修氏（鹿児島市）の詩集「犀（さい）」が第46回晩翠賞に選ばれた。土井晩翠を顕彰する目的で全国から公募している。九州からは初めての受賞とあって、鹿児島の短詩系文学で幅広く活躍をする高岡氏にとって何よりの励ましとなった。

郷土出版

鹿児島では初めての本格的な双書「かごしま文庫」は平成2年に刊行が始まった。発行元の春苑堂出版は書店業を縮小した後も発刊を続け、15年に「鹿児島民話の世界」の81巻で閉じたのは、野添紀之社長、金蔵照雄編集長の労苦によるところが大きい。高城書房（小原町）の「鹿児島人物叢書」は16年に始まり6巻まで出している。一方で9年には地域文化誌が相次いで休刊した。「ぴっくあっぷ」は通巻１３９号、辛口の評論誌「文化ジャーナル鹿児島」は54号が最後となったが、硬派の雑誌が失われたのは惜しまれる。羽島さち氏が奮闘してきた文芸誌「みなみの手帳」も14年に98号で終刊、昭和52年に創刊の上薗登志子氏の「随筆かごしま」も平成23年に１９０号で休刊となった。出版不況がささやかれるなか、地元出版12社は10年に南九州出版協会を結成、東京・銀座、大阪、福岡で順繰りに、南九州ブックフェアを開くなど意気軒昂（こう）なところをみせ、熊本、宮崎、沖縄の業者とも連携を深めた。南方新社（下田町）は原稿を求めて県外まで飛び出す元気のよさを見せ続けている。

美術　鹿児島の美術を先導してきた公募展の多くは、着実な歩みを重ねるなかで、郷土に刺激を与え続け、若手・新しい才能の発掘に努めてきた。それはより一層のレベル向上とマンネリを打破するための模索であり、公募展が時代にアピールしていくための変革でもあった。公募展に共通していえることは、出品者にとっ

て賞を狙うためだけでなく、それぞれが内面の自己主張をする場であり続けなければ、美術ファンと主催者の期待にこたえることはできまい。

総合展

戦後の荒廃の中で「いち早い文化の再生を」との願いを込めて始まった南日本美術展は平成25年で68回を数えた。海老原喜之助、吉井淳二の両氏が両輪となって、多くの人材を輩出し、特に海外美術留学生（海老原賞、吉井賞）として1年間研さんを積める制度は全国からうらやましがられ、7年にフランスで「留学生たちのパリ展」（後述）も開いた。25年までに送り出した人材は合計47人に上る。45回記念ではニューヨーク美術研修のＪＡＬ賞も加わった。13年の第56回では創設以来の大胆な再編、改組に踏み切った。制限を少なくし、自由な発想を促すため、洋画・日本画・彫塑・工芸・建築の5部門を、平面・立体・空間造形の3部門に改めた。現代美術を中心とした空間造形のため、霧島アートの森を新たに会場に加えた。吉井淳二審査委員長は特別顧問に退き、審査員は高階秀爾氏（東京大学名誉教授）を委員長にすべて県外の作家・評論家に委嘱した。旧弊にとらわれることなく21世紀に向かって新たな創造の波をとの意気込みであった。18年から選抜巡回展も始めた。20年には同時に開催していたジュニア展を、東光、二科のジュニア展と統合して幼稚園児から高校生までを対象とする南日本ジュニア展として再生させた。若い芽たちに創造性発揮の場を広げ、南日本美術展への架け橋にしたいとの狙いがある。吉井氏は元年に文化勲章を受け、16年に死去したが、１００歳を越えてもなお制作意欲が衰えることはなかった。

毎年、5月に鹿児島県美術協会が主体となって運営する県美展は、25年に60回を迎えた。若手・中堅の会員が減り、出品数も減少傾向にある。危機感を募らせた協会は「自分たちの公募展」意識を高めてもらおう

と23年に審査方法を改善、会員の希望者が参加できるようにして部門ごとに絞り込んだ後、入賞作品の順位を決めるようにした。若手の参加を促すため、高校生の出品料を大幅に減額した。会派、部門、年代を超えた交流、他者からの批判を受け止める風土を大事にしたいとの意図が込められている。

元気な鹿児島の女性たちを象徴するのが南日本女流美術展。25年の31回展には洋画、日本画、工芸美術の3部門に744点の応募があったのは、30号までの小品による出品がもたらした底辺拡大の成果にほかならない。県外から招く女性の画家、評論家らが審査に当たり、刺激を与え続けていることも好感されている。

書道

南日本新聞社が主催する南日本書道展は平成25年で63回になった。平成に入ってからは一般の応募が400点を超える年が多かったが、近年は300点台に落ち着いている。県外の書家を審査員に招くことで活性化を図る一方で、新進の優秀作品に贈る青山杉雨賞を8年に新設し、翌年には委嘱作家賞を設けて奮起を促した。開幕行事の作品解説会は書芸術を分かりやすく、親しみやすくしたと好評だ。教師が主体になって結成された鹿児島県書道会は今では一般の会員も増えた。一般、高齢者、学童に分けて年明けに開く鹿児島県書道展は26年で66回を数えた。書道の研究・奨励・普及向上を目的に昭和37年に設立された南日本書道会（金生町）は月刊で競書誌「書林」を幼児・小・中学生や高校生・一般、高齢者向けに発行する。約3万人に上る会員がいて、決められた課題を清書し、昇級・昇段が決まる仕組みによって書道文化の活性化を促してきた。南日本書道会が主催する南日本七夕書道展と南日本硬筆展には幅広い応募がある。

写真

南日本写真展の出品点数は平成11年の第29回展で初めて1千点を超えた。以来下回ることがなく推移している。県外の写真家が1～2人で審査に当たることが魅力にもなっている。18年ごろからはデジタルカメラ

による応募が目立つようになり、レンズを通して表現世界の面白さに目覚めた女性やシニアも少なくない。4年に始まったフォト農美展の応募も増え続け、第22回（13年）は過去最高の１３１２点に達した。農村風景をライフワークにする英伸三氏が一貫して審査を担う。暮らしの原点ともいえる「農」の営みを撮る試みは農業県にふさわしい。農美展はカメラを携え、変遷していく農作業や農村の肉声を聞こうとする市民を増やす役割を果たしている。25年に創立35年になった鹿児島県写真協会も年々、加盟団体を増やしており、合同写真展を通じて交流を深めている。

平成24年に40回記念展を開いた鹿児島陶芸展について、県外から審査に訪れた審査員は異口同音に「選考に悩むほど高レベル」と評するようになった。創作、テーマに部門が分かれていることが、挑戦する意欲をかき立て、観覧者の楽しみを広げている。陶芸人口の拡大は伝統を見直す動きにもつながった。22年4月、伝統工芸である白薩摩の普及継承を目指してＮＰＯ法人・伝統白薩摩研究会が発足、後継者難などに知恵を絞ることを決めた。同年11月には鹿児島の陶芸界の活性化を目的に有志75人が参加して、鹿児島陶芸家協会が発足した。早速、第１回新作展が開かれ、多種多彩な１８９点が並べられた。１８６７年のパリ万博に薩摩焼が出品されてから１４０年になるのを記念して、薩摩焼パリ伝統美展が平成20年11月から3カ月間、フランス・パリのセーブル国立陶磁器美術館で開かれた。国内の名品約１２０点が並べられ、約1万3千人を魅了した。東京、大阪、鹿児島で開かれた「里帰り展」も盛況で愛好家を増やすきっかけになった。

薩摩切子にも光が当たった。16年に黎明館で特別企画展が開催され、21年春には東京・六本木のサントリー美術館で「一瞬のきらめき　まぼろしの薩摩切子展」が開かれ、国内外のカットグラスを含めて１６０点が

展示された。これまで江戸切子とみられていたものを分類し直すなど新たな研究の成果も披露され、あらためて薩摩藩の集成館事業の素晴らしさを全国に発信した。

彫塑

60年以上、具象彫刻ひと筋に創作を続けてきた中村晋也氏に平成19年、文化勲章が贈られた。鹿児島関係者では6人目。三重県生まれで、昭和26年に鹿児島大学に赴任。以来、鹿児島のみならず日本の芸術文化に刻んだ功績は計り知れない。鹿児島中央駅東口広場に建つ「若き薩摩の群像」ほか、全国各地に数多くのモニュメントを残している。50年にわずか3人で結成した鹿児島女流彫塑会は16人の所帯となり、毎年サンジャック女流彫塑展を開いており、26年で39回を数えた。

美術交流

ミニ画廊がはやるなか、底辺拡大を目指して鹿児島市内の画廊が集まり平成6年に、鹿児島ギャラリー協会をつくった。鹿児島市の知的障害者施設・菖蒲学園は刺しゅう作品を10年に全国6カ所で発表、15年にはサンフランシスコで「驚きの布展」を開き、感動を米国にまで広げた。3年に始まった鹿児島と韓国・光州との交流美術展は、政治的問題とは切り離れたところで続き、理解を深め合っている。

洋楽

音楽　昭和28年に始まった南日本音楽コンクールは、増える一方の小・中学生のピアノ部門参加者に対応するため、57年にジュニアピアノコンクールを独立させ、さらに平成22年の29回からは4部制から5部制に学年を細分化した。それでも参加者はほぼ例年、６００人を上回っている。本体の音楽コンクールは管打楽、弦楽、作曲、声楽、ピアノの5部門で競い、23年で60回を重ねた。第27回からスタートし、53回まで続いた優秀者1人を海外派遣留学生として推薦する仕組みは、若手音楽家の育成に寄与した。

鹿児島県合唱連盟は合唱祭や講習会などを通じて、合唱の普及やレベルアップへの貢献が評価され、4年

に地域文化功労者として文部大臣表彰された。鹿児島交響楽団も昭和48年の創設以来行ってきた年2回の定期演奏会ほか舞台芸術鑑賞教室などの活動が認められて、平成10年にこの表彰を受けた。この年の定期演奏会では初めてピアノ協奏曲のソリストの公募を試み、15年には創立30周年を迎えたのを機に社団法人化し、姉妹都市ナポリで「第九演奏会」を行った。初の海外公演には公募の合唱団員などを含めて２６０人が参加した。鹿児島オペラ協会は結成30年の13年に書き下ろしの新作「ミスターシンデレラ」で記念公演を行った。鹿児島弁を取り入れた現代コメディーは新境地を開き、16年8月には東京の新国立劇場で日本オペラ協会との合同公演を行った。研究生公演と本公演を柱に巡回コンサートなど幅広い活動によって市民オペラとして定着している。鹿児島混声合唱団は全国合唱コンクールで2年連続の銀賞に輝いた勢いを駆って、8年のイタリア公演に続き、9年に英国ロンドン公演を行った。この年7月は鹿児島市立少年合唱団も発足25周年を記念してドイツ南部の町で開かれた第17回青少年国際音楽祭に参加して喝采を浴びた。59人の団員にとって自分たちの音楽が言葉の壁を越えて通じ、感動を呼ぶと体感した12日間の旅だった。創設25周年の10年にはオペレッタにも挑戦した。

ロンドン・シューベルト室内管弦楽団の首席客演指揮者を務めていた鹿児島市出身の尾崎晋也氏は6年にルーマニアに拠点を移し、国立交響楽団などで指揮棒を振る。ルーマニアのクラシック音楽を世界に紹介した功績で同国の文化功績勲章と上級騎士勲章を受けている。26年には日本とルーマニアの交流に貢献したとして外務大臣表彰された。

若手指揮者の登竜門とされる東京国際音楽コンクールを12年に制し、13年のブザンソン国際指揮者コン

クールで優勝した下野竜也氏は一躍、時の人となった。田上小でトランペットに触れたのが音楽との出会いで、甲南高、鹿児島大学と吹き続けたが、指揮者になる夢を捨てきれず、桐朋学園（東京都調布市）に進み、ウィーン国立音楽大学に留学した。18年に日本フィルハーモニー交響楽団を率いて行った初の凱旋（がいせん）公演は古里の聴衆の喝采に迎えられた。

全日本吹奏楽コンクールには吹奏楽人口を拡大する狙いから、3年連続で全国大会出場を果たすと1年休まなければならないというルールがあった。「3出休」と呼ばれる、この〝栄誉〟に浴したのが19年の松陽高等学校である。21年にはOBの吹奏楽団「緑」にもこのルールが適用され、レベルの高さを立証した。伝説的な吹奏楽指導者・屋比久勲氏は鹿児島情報高等学校で23年に「3出休」となったが、24、25年とまたも全国に挑んだ。20年のNHK大河ドラマ「篤姫」を音楽で盛り立てたのが、鹿児島市出身の作曲家・吉俣良氏で一段と飛躍する契機にもなった。

鹿児島県指定の無形文化財である薩摩琵琶は、大正13年にできた薩摩琵琶同好会が中心になって、伝統を受け継ぎ、後継者を育てようと尽力している。同好会の中に龍洋会と正風会があり、春と秋に弾奏大会を開くほか、市民文化祭などでもバチさばきを披露している。15年間ほど途絶えていた東京の同好会との交流が平成23年に復活し、互いに研さんを深めた。県内でただ1人の薩摩琵琶製作者だった塩田次郎氏に21年、安田生命クオリティオブライフ文化財団から、伝統文化継承の助成金が贈られた。氏が故人となった現在は後継者育成に加えて楽器の確保も課題になっている。

16年に鹿児島県箏曲会は地域文化功労者として文部科学大臣表彰を受けた。昭和48年に各流・会派の師範

らが結集して設立し、平成25年現在は生田流の筑紫会、昌絃会（宮城会）、彌生会の約１１０人が精進を積んでいる。新春演奏会は40回を数え、若手中心の春の箏コンサートは34回になった。11月には尺八グループと合同で邦楽演奏会も開いている。ほかに、鹿児島市には桐の音楽院があり、生田流箏曲と三絃の音色を磨いている。鍵盤で弾く大正琴はその簡便さから年配者に愛好家が多い。いくつかの流派があるが、鹿児島市内では錦翔流大正琴が多くの教室を構えている。

昭和48年に5流派で結成した鹿児島県尺八連盟で鹿児島市を中心に活動を続けているのは都山流と琴古流の竹友会と童門会の3流派だけになった。個々に演奏会を開くほか、研究会を持ち、後進の育成に努めている。平成24年には和楽器ファンを育てようと箏曲会などと一緒に「琴・尺八で心に残るメロディーを子どもらに聴かそうコンサート」を鹿児島市で開いた。アニメ主題歌など親しみやすい曲中心の構成で、ミニ講習会も行った。県指定無形文化財・天吹の伝承と普及を図るためできた天吹同好会は23年に創立30周年を迎えた。会員らは自分たちで手作りした縦笛を手に、古来の音色を引き継いでいこうと練習を重ねている。

節をつけて詩を吟詠する詩吟の組織には鹿児島県詩吟剣舞道連合会がある。昭和42年の発足当時は12会派あったが、平成25年では敬天吟詠会、香雲堂吟詠大山会、詩吟道桜洲流名銀塊、水真流隼吟詠会、薩摩詩吟会、薩摩神刀流神刀館、薩摩神刀流薩洲館、岳峰流蔵王吟詠会、梅鶯流白梅吟詠会の9流派となり、約２００人が練習に励んでいる。連合会は年1回、大会を開くほか、南洲神社例大祭で南洲翁の詩などを吟詠奉納するのも恒例行事である。このほか鹿児島市内には錦城会鹿児島県本部があり、40の教場を持つ。鹿児島県吟剣舞道総連盟も活動を続けている。

舞台芸術　謡曲団体や古典芸能ファンからの要望が強かった本格的な能舞台が、平成15年にオープンしたかごしま県民交流センターのホールに備わった。それまで県内には県文化センターに組み立て式の簡易なものがあっただけで、九州では福岡、大分に次ぐ施設である。こけら落としの祝賀能のチケットは3流派の競演ということもあり、即日完売した。翌年には能楽師集団による公演とワークショップもあり、活気づいた。能舞台は流派を越えた日本舞踊の共演や洋楽コンサートにも活用され、和の舞台との相乗効果をもたらした。

謡曲

ユネスコの世界無形遺産に指定された能楽の諸会派を束ねている鹿児島謡曲連合会は長い歴史と伝統を持つ。現在はシテ方の観世流（誠風会）、金剛流（松扇会）、喜多流（出水喜多会）、金春流（小春会、かすみ会）、宝生流（皓月会、つゝ美会）に、狂言の大蔵流（狂言の会、つくし会）と囃子（はやし）方の幸流（一の会、つくし会）、一噌流（笛の会）を加えて、年1回の鹿児島謡曲連合大会に向け稽古に励んでいる。60回の節目となった平成23年は全員が県民交流センターの能舞台に上がり「高砂」をうたった。各会派はそれぞれ発表会を開くほか、県や文化庁が行う小・中学生や初心者向けの能楽教室にも積極的に携わり、すそ野を広げようと尽力している。長年にわたる能楽の振興・普及に貢献したとして23年、連合会顧問の上野寧子氏に日本能楽会功労賞が贈られた。近年は薪能が磯仙巌園など各地で開催されるようになったのをきっかけに、幽玄な世界に親しむ人も増えている。

洋舞

白鳥みなみバレエ団は平成2年、文化庁主催の芸術祭に3度目の参加を果たした。唯一の地方勢として創作バレエで挑み、高い評価を受けた。意欲的に創作にも取り組んできた主宰の白鳥氏は長年のバレエ界への貢献が認められ、3年に舞踊界で最も権威があるとされる橘秋子賞を受けた。創作舞踊家の浜野允秀氏やモ

ダンダンスの山田みほ子氏も社会性に満ちた刺激的な試みで注目された。アソカバレエ研究所を主宰していた黒田美穂子氏は、後進の育成に努める傍ら「白鳥の湖」の全幕公演に挑んだ。年少者から若い人を主体にジャズダンスやヒップホップなどリズム系のダンスが盛んになり、鹿児島市内にもスタジオ、教室が数多くある。意欲的に発表会を開いたり、おはら祭などイベントの盛り上げにも一役買っており、全国的なコンテストで活躍する人も出てきた。

日本舞踊

日本舞踊協会鹿児島県支部は吾妻、仙田、花柳、藤間、松本の5流派で結成しており、隔年で開く支部公演は平成24年で20回を数え、記念の総踊りを披露した。21年には「クラシック音楽と日本舞踊との新たな出逢い」と題して弦楽四重奏などの演奏で踊るといった試みにも挑戦した。県内にはこのほか若柳流や竹若流などの社中もあり、鹿児島県古典舞踊協会も定期公演を行っている。郷土舞踊では永田明子氏の年齢を感じさせない活躍が光る。おはら祭はスタート当初から踊り連の振り付けの指導を続けており、祭りの盛り上げに欠かせない存在となっている。

演劇

旗揚げの意気込みはどこへ、いつの間にか活動停止や休止に陥るケースが多い鹿児島のアマチュア劇団にあって、昭和49年に女性4人で立ち上げた劇団風見鶏はすっかり古株になった。創立メンバーで残っているのは末吉みつ子氏だけで、けいこ場を使って実験的な作品を上演するアトリエ公演は百数十回に及ぶ。平成22年5月、拠点を西千石町のビル屋上に移す際、再起動、再出発への思いを込めて劇団名にRを挟み込んだ。朗読会や小中学校への出前授業などに力を入れており、地道でも確かな足取りを続けている。鹿児島の舞台芸術を充実させようと19年10月に鹿児島演劇協議会が発足した。県内の11団体、10個人が参加、連携を深め、

情報を共有するなかで、地元の演劇界の活性化を図ることを目指す。代表理事には鹿児島市の劇団ＬＯＫＥの仮屋園修太氏が就いた。ともに13年に旗揚げした縁から、伊佐市の演劇集団・非常口との合同公演を実現させるといった成果にもつながった。協議会は「鹿児島演劇見本市」を毎年開催する原動力にもなった。限られた持ち時間の中でオリジナル作品などを紹介する趣向だ。このほか25年現在、鹿児島市内には上町クローズライン（宇都大作代表）、アクターズファクトリー鹿児島、鹿児島大学演劇部・火山団、演劇集団宇宙水槽（宮田晃志代表）、劇団鳴かず飛ばず（米田翔太代表）、劇団ＣＬＯＶＥＲ、劇団・凪などがあり、けいこ場や団員確保といった悩みを一様に抱えながらも、定期公演や出前舞台、映像制作などに取り組んでいる。一方、50年にわたって鹿児島で良質な児童演劇を提供し続けてきた人形劇団・杉の子と、人形劇を軸に地道な活動を続けてきた鹿児島県児童演劇サークルがともに19年で活動を停止した。

鑑賞団体

演劇、音楽などの鑑賞団体としては鹿児島市民劇場と鹿児島音楽文化協会(音協)、九州労音鹿児島センターがある。前身の鹿児島映画演劇サークル協議会時代からすると半世紀以上の歴史を持つ市民劇場は、会員制で良質の舞台を安価で見られる一方で、運営にも携わる独自のスタイルを貫いている。鹿児島音楽文化協会は地域文化の振興と企業の文化的貢献を目指して昭和44年に設立された。平成25年現在、個人約２５００人のほか、県経営者協会の事業所１３０社などが会員で、ミュージカルから落語まで幅広いジャンルにわたって提供してきた。通算すると約１４００公演になる。昭和29年に鹿児島勤労者音楽鑑賞協議会としてスタートした労音は現在、クラシック、ルスト、コムラッドの三つの会員制度に支えられ、感動の輪を一般の愛好家にまで広げている。演劇鑑賞などを通じて心と文化を耕し、子育てにも役立てる子ども劇場の活動が鹿児

島で始まって平成26年で40年になる。鹿児島市内には小学校やホールなどを借りて開く劇場が14あり、鹿児島市子ども劇場連絡会に結集して、活動を続けている。

茶道・華道　戦前からの長い歴史を持つ裏千家淡交会鹿児島支部は平成6年に鹿児島市の磯庭園（現仙厳園）に、茶せん塚を建立した。支部創立50周年の記念行事で、使えなくなった茶せんへの感謝と茶道の先人たちへの鎮魂の思いを込めた。以来、茶せん供養は毎年の恒例になった。11年には薩摩藩の琉球王国侵攻という負の歴史を越え、鹿児島・沖縄両県の茶道関係者やロータリークラブが奔走して合同茶会などを那覇市で開いた。その後も毎年、交互に沖縄、鹿児島で実施している。その功績などをたたえるため16年、当時の支部長だった島津修久（のぶひさ）氏に第2回茶道文化賞が茶道裏千家（京都市）から贈られた。表千家同門会鹿児島県支部は平成元年に家元らを招いて鹿児島で初めての同門会全国大会を市民文化ホールと磯庭園で開いた。男性だけで構成する鹿児島県表千家同友会は毎年、歳末助け合い茶会を催している。りりしい男衆のお点前による募金活動は昭和48年に始まり、すっかり冬の風物詩になったが、平成25年からは支部全体の催しになった。急須を使ってお茶を美しく入れる煎茶道は鹿児島には方円流、南派煎茶玉露方式、皇風煎茶礼式、知足庵流、光風流があり、2年に1回程度茶会を開いている。県内茶産地の基盤づくりに功績のあった樋渡次右衛門翁の頌（しょう）徳碑（南栄3丁目）の前で開かれる献茶祭でお点前を披露するのも慣例である。

華道にはさまざまな流派があり、様式・技法も異なる。鹿児島では県連合華道会に結集する流派が核になって活動している。平成元年に19を数えた流派は消長もあって25年現在、池坊、小原流、巌松古流、新池坊、

心潮派、専生池坊、草意流、そうえい流、草月流、蒼仙流、勅使河原和風会、文人流、大和池坊、龍生派、嵯峨御流、勅使河原会、専心池坊の17流派となっている。指導者の高齢化は避けがたく、門下生も2千人ぐらいに減少したと推察される。県連合華道会は南日本新聞社との共催で春秋2回、連合華道展を山形屋で開いており、秋は市民文化祭の参加行事となっている。

芸能・映画　シンガーソングライター長渕剛氏は平成16年8月、桜島で野外オールナイトコンサートを決行した。全国から7万5千人が桜島赤水町の溶岩原に特設されたステージに詰めかけた。9時間に及ぶ大音響は対岸まで響き渡った。ライブを収録したCD、DVDの売り上げも好調で、会場跡にはモニュメントが建ち、ファンの聖地になった。俳優としても活躍しており、11年の映画「英二」では鹿児島を生まれ故郷に仕立て、ロケを行っている。

映画界最大の栄誉であるアカデミー賞。平成21年の第81回の短編アニメーションでオスカー像を手にしたのは鹿児島市出身の加藤久仁生監督による「つみきのいえ」だった。受賞で映画のDVDはもちろん、絵本にも注文が殺到するほどのブームとなり、長島美術館で初個展も開かれた。鹿児島玉龍高等学校を卒業して進んだ多摩美術大学でアニメーション制作に目覚めた。帰郷しての鹿児島弁を交

オールナイトコンサート記念「叫びの肖像」

えた舞台あいさつには人柄が表れ、またファンを増やした。加藤監督は文化庁長官表彰や鹿児島市芸術文化栄誉賞も受けた。

シネコン

テレビやレンタルビデオに押されて、全国の映画館の数が最低を記録したのは平成5年のことである。それでも天文館には各映画配給会社の系列館が健在だったが、16年以降、鹿児島東映、松竹タカシマ、シネシティ文化、鹿児島東宝と閉館が相次ぎ、18年10月には遂にゼロになった。代わって登場してきたのがシネマコンプレックス（シネコン）と呼ばれる複合型映画館である。県内で初の本格的なシネコン「鹿児島ミッテ10」（スクリーン10、座席１９６５、車いす席19）は16年９月、ＪＲ鹿児島中央駅ビルに開館した。18年10月には与次郎1丁目の複合商業施設に「ＴＯＨＯシネマズ与次郎」（同10、同１９０５、同17）もオープンする。隆盛を誇るシネコンの陰で、ヒット作、娯楽作品ではなくとも良質の映画を見たいというファンが集まって、19年に「鹿児島コミュニティシネマ」（黒岩美智子代表）が発足した。ホールを借りて月1回程度、自主上映する活動は、22年4月に呉服町に開業した「マルヤガーデンズ」内での客席数39のミニシアターの運営へとつながり、同館のデジタル化には３００万円を超す募金が寄せられた。天文館に再び映画館の灯を、まちづくりの核を、と願う商店主らの声は事業会社の設立に拡大、24年5月に「天文館シネマパラダイス」（同7、同８６３、同12）が完成した。しかし、3つのシネコンで合計27スクリーンによるパイの奪い合いを懸念する声も聞かれる。

ロケ誘致

映画やテレビ、ＣＭなどのロケ地になると、全国から注目を集め、観光面などでも計り知れない効果があることから、撮影を誘致支援するフィルム・コミッション（ＦＣ）に乗り出す動きが各地で湧き上がった。

鹿児島では鹿児島市が平成14年からＦＣ事業を開始したほか、17年に鹿児島青年会議所を中心に結成された映画「海猿２」を応援する会が母体になって20年に任意団体・かごしまフィルムオフィス（ＫＦＯ）が発足、23年３月にＮＰＯ法人化された。だが、取り組み自体が遅かったばかりか、行政抜きの民間組織のため、財政的に苦しい状況が続いている。とはいえ、「北辰斜にさすところ」、錦江湾横断遠泳を描いた「チェスト」、宇宙から奇跡の生還を果たした「はやぶさ」３部作などロケ支援が続いた。22年公開の「海の金魚」は錦江湾の「鹿児島カップ火山めぐりヨットレース」が、23年の是枝裕和監督作品「奇跡」は九州新幹線全線開業が題材だった。25年に撮られた「六月燈の三姉妹」は、鹿児島市出身の俳優・西田聖志郎氏の企画ということもあり、一之宮神社や真砂商店街ロケは大勢の地域住民がボランティアで支えた。

第二章　文　化　財

南九州における政治・経済・文化の中心として発展してきた鹿児島市には地域ではぐくまれ、保存・伝承されてきた文化財が数多くある。これらを未来へ伝えていくには文化財の保存と活用を積極的に推進していく必要がある。そのためには、市民一人一人が貴重な文化的財産を大切にする心を育てることが欠かせない。平成10年から16年にかけて、新たに国の重要文化財（歴史資料）に尚古集成館が所蔵する島津斉彬の銀板写真と形削盤、木村嘉平関係資料、大久保利通関係資料が指定された。日本人が撮影した現存最古の写真と幕末にオランダから輸入された工作機械、わが国の印刷史を刻んだ活字などで、いずれも黎明期の日本の近代技術を物語る。さらに18年には大口筋・白銀（しらがね）坂などが国の史跡に指定された。

Ⅰ　文化財行政

鹿児島市は未来に継承すべき文化財の保護を図るとともに、市が管理する文化財の補修・整備を行い、学習や観光などにも活用することを目指している。発掘した遺跡の公開や発掘成果の積極的な公開を進め、学習や体験活動の場としても提供している。

合併に伴って、鹿児島市教育委員会は市文化財審議会の答申を受けて平成17年4月、合併前の5町の指定文化財58件のうち、38件を市指定文化財に指定したと告示した。沖小島の薩英戦争砲台跡など15件が記念物、

本城花尾神社棒踊りなど7件が無形民俗文化財で、東下の田の神など15件が有形民俗文化財（民俗資料）、有形文化財（歴史資料）が1件。歴史的根拠が明確になっていないものや、所有者の同意が得られていない20件については保留扱いとした。指定から外れた文化財は行政の関与がなくなることで、説明板の老朽化を不安視する声もあった。この結果、鹿児島市内にある指定文化財は187件となっている。（第1表参照）鹿児島市教育振興計画で掲げた27年までに190件の指定・登録に近づいた。市指定が県指定に、県指定が国指定という格上げはあったが、指定が外れたものはない。個々の文化財については「鹿児島市の文化財」（鹿児島市教育委員会編）に詳述してあるので割愛する。平成に入ってからの指定については第2表を参照。

デジタルミュージアム　近代洋画を中心とする

第1表　鹿児島市内の指定文化財等の数　（平成26年5月末現在）

区分	種別	国指定	県指定	市指定	計
有形文化財	建造物	3	3		6
	絵画		3	9	12
	彫刻		3		3
	工芸品	3	13	9	25
	歴史資料	5	3	2	10
	古文書		1		1
	書跡		4		4
	考古資料		1	2	3
無形文化財	芸能		2		2
有形民俗文化財	民俗資料		3	27	30
無形民俗文化財	民俗芸能		1	11	12
	風俗慣習			1	1
記念物	史跡	5	8	22	35
	名勝	2	1	1	4
	天然記念物	5	6	2	13
	（その他）	(9)			(9)
計		23(9)	52	86	161(9)
登録文化財	建造物	26			26

※その他の9（種）は動物園で飼育されている天然記念物

第２表　鹿児島市の指定文化財等一覧表（平成以降の指定分）

国指定文化財				
区　　分	種　別	名称	所在地	指定年月日
重要文化財	歴史資料	木村嘉平関係資料	尚古集成館	10年６月30日
〃	〃	銀板写真（島津斉彬像）	尚古集成館	11年６月７日
〃	〃	形削盤	尚古集成館	12年６月27日
〃	〃	大久保利通関係資料	歴史資料センター黎明館	16年６月８日
記念物	史　跡	大口筋　白銀板　龍門司坂	宮之浦町他	18年７月28日
〃	名　勝	旧島津氏玉里邸庭園	玉里町	19年７月26日
重要文化財	建造物	鹿児島旧港施設　新波止一丁台場　遮断防波堤	本港新町	19年12月４日
記念物	史　跡	旧集成館附寺山炭窯跡、関吉の疎水溝	吉野町	25年３月２７日追加
県指定文化財				
区　　分	種　別	名　　称	所在地	指定年月日
有形文化財	建造物	花尾神社本殿（附宮殿三基）・祝詞殿・幣殿・拝殿	花尾町	14年４月23日
〃	〃	八幡神社本殿附宮殿　敷板１枚　棟札14枚	本名町	17年４月19日
〃	彫刻	伝島津忠昌像	尚古集成館	７年４月12日
〃	〃	大権現忠国（島津忠国）像	尚古集成館	７年４月12日
〃	工芸品	薩摩硝子　島津家伝来	尚古集成館	17年４月19日
〃	〃	葵牡丹紋七宝繋蒔絵雛道具	尚古集成館	20年４月22日
〃	〃	白釉茶碗火計手	市立美術館	23年４月19日
〃	〃	黒蛇蝎釉茶碗	歴史資料センター黎明館	23年４月19日
〃	〃	白蛇蝎釉茶碗	歴史資料センター黎明館	23年４月19日
〃	歴史資料	犬追物関係資料	尚古集成館	４年３月23日
〃	〃	英艦入港戦争図（薩英戦争絵巻）	尚古集成館	９年４月21日
〃	古文書	規式・料理関係文書	尚古集成館	18年４月21日
無形文化財	芸能	天吹	天吹同好会	２年３月23日
天然記念物	植物	世界で初めて精子が発見されたソテツ	城山町	20年４月22日
〃	地質鉱物	鹿児島市西佐多町の吉田貝化石層	西佐多町	20年４月22日
市指定文化財				
区　　分	種　別	名　　称	所在地	指定年月日
有形文化財	絵画	桃田柳栄筆「官女図巻」一巻	市立美術館	３年２月27日
〃	歴史資料	天保年間鹿児島城下絵図	市立美術館	元年３月31日
〃	〃	市来家文書	歴史資料センター黎明館	17年７月31日

有形文化財	考古資料	掃除山遺跡出土品　一括	ふるさと考古歴史館	11年２月15日
〃	〃	草野貝塚出土品　一括	ふるさと考古歴史館	11年２月15日
無形民俗文化財	民俗芸能	玉利の鎌手踊り	下福元町	元年３月31日
〃	〃	本城花尾神社棒踊り	本城町	17年３月31日
〃	〃	小池島廻り踊り	桜島小池町	17年３月31日
〃	〃	岩戸の庖瘡踊り	花尾町	17年３月31日
〃	〃	花尾の太鼓踊り	花尾町	17年３月31日
〃	〃	大平の獅子舞	花尾町	17年３月31日
〃	〃	西俣の八丁杵踊り	西俣町	17年３月31日
〃	〃	西上の太鼓踊り	東俣町	17年３月31日
〃	風俗慣習	鹿児島祇園祭（おぎおんさあ）巡行行事	東千石町	24年７月11日
有形民俗文化財	風俗資料	新村の田の神	伊敷六丁目	元年３月31日
〃	〃	東下の田の神	東佐多町	17年３月31日
〃	〃	鵜木の田の神と石碑	西佐多町	17年３月31日
〃	〃	帖地の田の神	喜入生見町	17年３月31日
〃	〃	森園の田の神	春山町	17年３月31日
〃	〃	上園の田の神	郡山町	17年３月31日
〃	〃	茄子田の田の神	花尾町	17年３月31日
〃	〃	弘治期の十三仏設斎碑	東佐多町	17年３月31日
〃	〃	大永期の勧請石碑	東佐多町	17年３月31日
〃	〃	六字名号供養百万遍石塔	東佐多町	17年３月31日
〃	〃	本名八幡の庚申石幢	本名町	17年３月31日
〃	〃	宮之浦の三重石塔	宮之浦町	17年３月31日
〃	〃	方崎（穂崎）庚申塔	桜島横山町	17年３月31日
〃	〃	藤野の庚申塔	桜島藤野町	17年３月31日
〃	〃	黒地蔵	喜入中名町	17年３月31日
〃	〃	有屋田の庚申供養三層塔	有屋田町	17年３月31日
〃	〃	庚申仁王石像	本城町	17年８月１日
記念物	史跡	本立寺跡	清水町	元年３月31日
〃	〃	南泉院歴代住職の墓	小野町	元年３月31日
〃	〃	心岳寺跡	吉野町	12年10月12日
〃	〃	関吉の疎水溝	下田町	15年３月17日
〃	〃	仏智山津友寺跡	西佐多町	17年３月31日
〃	〃	桐野利秋田盧跡と田盧碑	本城町	17年３月31日
〃	〃	寺前の五輪塔と宝塔	本名町	17年３月31日
〃	〃	島津義弘蟄居跡	桜島藤野町	17年３月31日
〃	〃	沖小島砲台跡	桜島横山町	17年３月31日
〃	〃	武貝塚	桜島武町	17年３月31日
〃	〃	仙寿院跡	入佐町	17年３月31日
〃	〃	上坊石塔群	上谷口町	17年３月31日
〃	〃	町田家の墓	石谷町	17年３月31日

記念物	史跡	石谷の石坂	石谷町石谷西	17年３月31日
〃	〃	花尾神社の石塔群	花尾町	17年３月31日
〃	〃	常盤五輪塔群	郡山町	17年３月31日
〃	〃	川田氏累代墓石塔群	川田町	17年３月31日
〃	〃	都迫の念仏かくれ窟	本名町	17年８月１日
〃	植物	藤崎家の大楊梅	桜島藤野町	17年３月31日
〃	〃	キイレツチトリモチ自生地	喜入町	17年３月31日
登録文化財				
区　　分	種　別	名　　称	所在地	指定年月日
登録有形文化財	建造物	県立博物館考古資料館	城山町	10年12月11日
〃	〃	鹿児島市庁舎本館	山下町	10年12月11日
〃	〃	旧鹿児島刑務所正門	永吉一丁目	10年12月11日
〃	〃	南日本銀行本店	山下町	10年12月11日
〃	〃	磯珈琲館（旧芹ケ野島津家金山鉱業事業所）	吉野町	11年８月23日
〃	〃	磯工芸館（旧島津家吉野殖林所）	吉野町	11年８月23日
〃	〃	仙巌園内濾過池	吉野町	13年８月28日
〃	〃	鹿児島県立鹿児島工業高校大煙突	草牟田二丁目	16年６月９日
〃	〃	鹿児島市中央公民館	山下町	17年11月10日
〃	〃	鹿児島大学総合研究博物館常設展示室	郡元一丁目	18年10月18日
〃	〃	南洲神社電燈一対	上竜尾町	18年10月18日
〃	〃	潮音館（旧重富島津家住宅米蔵）	清水町	19年５月15日
〃	〃	鹿児島県立甲南高校本館	上之園町	19年７月31日
〃	〃	鹿児島県立鹿児島中央高等学校本館および講堂	加治屋町	19年７月31日
〃	〃	鹿児島銀行本店別館	金生町	19年10月２日
〃	〃	鹿児島旧港北防波堤灯台	本港新町	20年３月７日
〃	〃	県政記念館（旧鹿児島県庁舎本館）	山下町	20年４月18日
〃	〃	旧鹿児島県庁舎正面門	山下町	20年４月18日
〃	〃	旧鹿児島県立尋常中学校門	山下町	20年４月18日
〃	〃	鹿児島県立博物館（旧鹿児島県立図書館）	城山町	20年４月18日
〃	〃	鹿児島県民教育文化研究所	春日町	26年４月25日
〃	〃	旧重富島津家別邸主屋	清水町	26年４月25日
〃	〃	旧重富島津家別邸石塀	清水町	26年４月25日
〃	〃	児玉家住宅主屋	常盤一丁目	26年４月25日
〃	〃	児玉家住宅井戸屋	常盤一丁目	26年４月25日
〃	〃	児玉家住宅表門	常盤一丁目	26年４月25日

美術作品や史跡、埋蔵文化財、薩摩焼や薩摩切子といった伝統工芸品、ゆかりの作家の遺品など、鹿児島市に数多くある貴重な歴史・文化遺産を紹介し、電子画面で手軽にそのすばらしさを認識してもらおうと「かごしまデジタルミュージアム」が平成14年4月に稼働した。デジタル技術でデータベース化し、Ｗｅｂサイト上で公開するもので、鹿児島市が10年にまとめた「鹿児島市地域情報化計画」に示された事業の一つである。市立美術館をはじめ、ふるさと考古歴史館、西郷南洲顕彰館、かごしま近代文学館・メルヘン館、維新ふるさと館ともリンクしており、市内に点在する文化資産と時空を越えて接することを可能にした。アクセスは24年で6万8306件あった。

Ⅱ　文化財の保存・活用

建造物　平成8年の文化財保護法改正によって文化財登録制度が創設された。国レベルで重要なものを厳選して強い規制と手厚い保護を行う従来の指定制度では、開発や生活様式の変化などによって、急速に消滅の危機にさらされている多種多様な近代・近世の文化的建造物を保護するには不十分として導入された。届出制と指導・助言・勧告が基本になっており、文部科学大臣が文化財登録原簿に記載することで、より幅広く保護の網をかける狙いである。改修などの規制が緩やかなため、現役の建物でも登録しやすいといった特徴がある。法改正に従って鹿児島市庁舎など4件が10年12月、登録有形文化財となった。その後も、20年までに磯工芸館や鹿児島県立甲南高等学校本館など16件が登録され、26年3月には鹿児島県民教育文化研究所など6件が追加された。（第2表参照）登録対象は当初、建造物に限られていたが、16年の文化財保護法改

正で建造物以外の有形文化財も加えられた。なお、一丁台場など鹿児島旧港施設は19年に国指定の重要文化財になり、花尾神社（花尾町）本殿などは14年に、八幡神社（本名町）本殿などは17年に県指定の有形文化財になった。

昭和2年に完成した当時は九州一の公会堂と称された鹿児島市中央公民館は平成17年に、国の登録有形文化財になった。鉄筋コンクリートで地上3階、地下1階建てで延べ床面積が3480平方㍍ある。戦争の傷痕も残るが、玄関両脇に対称的に配置された塔屋、イスラム風のアーチ窓など欧亜折衷の重厚感漂う外観、内装が評価された。翌春からライトアップも始まり、威容に親しみやすくなった。25年には老朽化に対応するとともに、バリアフリー化も図られた。市民の掛け替えのない財産として守り活用していきたい。

19年に国指定名勝となった旧島津氏玉里邸庭園の一般公開（下御庭のみ）が23年4月から始まった。指定を受け鹿児島市は2億円をかけ、土砂に覆われていた護岸を復元、シロアリ被害もあり開かずの扉だった黒門を修復するなどして緑豊かな回遊式の大名庭園の往時をよみがえらせた。25年には茶室も28年ぶりの改修を終え、図面や痕跡から水屋を復元、内装を塗り直し、瓦も9割を葺(ふ)き替えた。明るくなった茶室では鹿児島女子高等学校の生徒らが気の引き締ま

旧島津氏玉里邸庭園の黒門

る思いで茶道のけいこに励んでおり、26年4月からは島津興業が指定管理者となり有料で市民に開放された。

日本初の機械式紡績工場の英国人技師の宿舎として建造された国指定重要文化財の旧鹿児島紡績所技師館（異人館）はリニューアルを終え、23年10月に有料化されオープンした。和洋折衷の構造や調度品で暮らしぶりを紹介するとともに、世界遺産登録を見据えて周辺の史跡を含めた歴史的価値を前面に打ち出した。

郷土芸能　郷土芸能が正しく伝承されることは、文化財に対する理解と関心を深めるばかりでなく、地域のきずなを保ち、郷土愛をはぐくむことにもつながる。鹿児島市は郷土芸能団体を対象にその保存や振興活動に対する経費の一部助成や映像による記録・保存を行っているが、急激な都市化の進展で存続が危ぶまれるものも少なくない。郷土芸能保護団体は25年現在、市内に次の56団体あるが、うち13件が県もしくは市の無形文化財指定を受けている。ただ、活動休止中のところも13団体ある。

○桜島・島廻り節、棒踊り（帯迫）、虚無僧踊り（一丁田）、棒踊り（西菖蒲谷）、棒踊り（春山）、●虚無僧踊り（中山）、太鼓踊り（小山田）、チンチクチン踊り＝二軒茶屋太鼓踊り保存会、虚無僧踊り（広木）、棒踊り（花野）、○西田橋・地つき唄＝正調おはら節保存会、棒踊り（皆房）、○山田の鉦踊り、○玉利の鎌手踊り、棒踊り（下花棚）、米洗い節＝永吉町芸能保存会、田植え踊り（西別府）、棒踊り（田上）、棒踊り（上花棚）、太鼓踊り（西別府）、銭太鼓踊り（野頭）、石当節（錫山）、ソバ切り踊り＝谷山芸能保存会、棒踊り（犬迫荒磯）、棒踊り（大久保）、馬方踊り（平川）、催馬楽舞＝せばる隼人舞保存会、棒踊り（茂頭）、棒踊り（中間）、川上棒踊り、小山田獅子踊り、古屋敷棒踊り、五位野棒踊り、○本城花尾神社棒踊り、さつま編笠踊り、城内天狗踊り、西下田之神棒踊り、吉水棒踊り、棒踊り（松浦）、○小池島廻り踊り、瀬々串棒踊り、中名

上棒踊り、中名中棒踊り、中名下棒踊り、宮地棒踊り、仮屋崎早乙女踊り、一倉鎌踊り、前之浜チョイのチョイ踊り、生見おた踊り、入佐棒踊り、○西上の太鼓踊り、○太平の獅子舞、○岩戸の疱瘡踊り、○花尾の太鼓踊り、○西俣の八丁杵踊り、○鹿児島祇園祭（おぎおんさあ）巡行行事＝八坂神社奉賛会。

※●は県指定、○は市指定の無形文化財。特に記載のないものは、当該芸能・地区名を冠した保存会によって継承されている。

埋蔵遺跡文化財　鹿児島県考古学会は昭和24年の創設以来、機関誌発行を続け、研究大会や各県と合同研究会を開くなどの活発な活動が評価され、平成10年に地域文化功労者として文部大臣表彰を受けた。考古学ブームが起こり、地中で眠ってきた先人たちの遺産に対する住民の理解は高まってきたが、高速道路や区画整理などの各種開発が進むにつれ、発掘件数は膨れ上がり、県や市町村の埋蔵文化財専門員は調査に追われて十分な研究ができないのが実情である。県考古学会は2年9月に埋蔵文化財保護について、関係機関に対して大規模開発に伴う遺跡の処置、埋蔵文化財担当職員の充実など7項目の要望書を関係機関に提出し、一層の保護策を求めた。

掃除山遺跡

昭和61年に始まった下福元町の県道工事に伴い、平成2年度に掃除山の発掘調査が行われ、縄文時代草創期（約1万1千年前）の竪穴式住居跡や調理用の煙道付き炉穴、集石遺構などが検出され、隆帯文土器や石鏃（ぞく）・磨石・石皿・石斧などの石器も見つかった。それまで同時代のほかの遺跡からは土器や石斧が小数出土しただけなので、縄文時代の代表的な生活道具が見つかった意義は大きい。遊動狩猟生活から長期滞留・大量貯蔵に重きを置いた定住生活へと移行する縄文文化の黎明期を知る上で貴重な発見となった。

平成6年度の西回り自動車道建設に伴う松元町（当時）の仁田尾遺跡発掘では、九州最大規模である、1万点を超す旧石器時代の石器が出土した。同町の前原遺跡からは8年度に竪穴住居や連穴土坑が見つかり、青森県三内丸山遺跡より3千年も遡ると注目された。定住生活の始まりなど縄文時代の歴史認識を覆す発見にわく一方で、調査後の遺跡が取り壊される運命から逃れられるケースは少ない。だからこそ、発掘された文化財を保存するとともに、博物館などで実物を展示することで、歴史に対する理解を深めてもらうことが重要になる。鹿児島市立ふるさと考古歴史館では、掃除山遺跡や、約３５００年前の草野貝塚の当時の生活を紹介している。

鹿児島市教育委員会は14年に旧石器時代から近世までの遺跡を網羅した鹿児島市遺跡分布図の改訂版を作成し、地域の歴史に興味・関心を持ってもらうため、市内の学校や研究機関に配布した。

甲突川五石橋　甲突川に架かる五つの石橋は空襲でも破壊されず、創建以来約１５０年間にわたって現役の橋として利用されてきた。だが、平成5年の8・6豪雨の奔流は新上橋と武之橋を押し流した。その6日後、鹿児島県は河川激甚災害対策特別緊急事業（激特）を導入して抜本改修のため、残る石橋の撤去・移設を表明した。4連、5連のアーチを持つ五石橋は増え続ける交通の障害ともなり、昭和40年代から保存か撤去かをめぐる論議が長く続いてきた。重要文化財指定の動きの一方で移設・架け替えの計画が浮上するなか、西田橋と高麗橋は歩道橋を並行して架けることで問題は沈静化しかけた。ところが、49年になって鹿児島県は洪水防止のための甲突川改修には五石橋の全面撤去が不可欠と鹿児島市に申し入れ、論争は再燃した。市は51年に都市河川改修対策協議会を設置し検討を行った。市民集会が開かれるなど保存運動も広がって、結

論は先送りの状態が8・6豪雨の前まで続いていた。

災害に便乗するように懸案の解決を図ろうとする行政の姿勢に、あくまで現地保存を求める市民グループは反発を強めた。しかし、平成6年1月に県は激特工事に着手、玉江橋から解体が始まり、高麗橋と続いた。文化財保護をめぐり世論は二分され、洪水流量の算出データの妥当性についての論争や分水路案、はしご胴木の発見もあったが、県は西田、高麗、玉江橋の移設先に祇園之洲近くの営林署跡地を決定する。移設反対運動は広がり、市民グループは7年3月、撤去の是非を問う市民投票条例の制定を請求したが、赤崎義則鹿児島市長は市民投票条例案を反対意見付きで市議会に提出する。条例案はいったん審議未了となったものの4月、臨時市議会は賛成少数で否決した。4万4千人に迫る署名を集めた県民投票条例制定の直接請求も11月、県議会で否決される。三つの橋にとって最後の砦となった県文化財保護審議会は深夜に及ぶ論議の末、現地保存が多数としながらも両論併記の答申に至る。これに対して12月5日、県教育委員会は臨時会で移設を許可し、即日、知事に通知した。

4連アーチの西田橋の解体は8年2月に始まり、木製の土台、はしご胴木が姿を現すと、巨大な石造物を支えるため凝らした先人の技術に驚きが広がった。ボランティアグループ「西田橋を拓本で残す会」は県民

石橋記念公園

の助けを得て、1年がかりの地道な作業を繰り返して高欄から基礎まですべてを拓本に収めた。移設復元は無理と危ぶむ声もあったが、西田橋は県、玉江橋と高麗橋は市が担当して三つの橋は12年4月、石橋記念公園（浜町）などに移設復元された。総事業費は約57億円。西田橋には藩政時代の御門が復元され、五石橋の歴史や架橋技術を紹介する記念館も造られている。記念公園の入園者は19年8月、１００万人を突破した。

Ⅲ　「集成館」の世界文化遺産登録へ向け

幕末から第二次世界大戦期までの間に建設され、日本の近代化に貢献した産業・交通・土木等に係る建造物を「近代化遺産」と位置づけ、調査する動きは平成2年から始まった。また、6年の第19回ユネスコ世界遺産委員会では、「産業遺産」など近現代の文化も世界遺産として登録し、保護していこうという方針（グローバル・ストラテジー）が採択された。

「明治日本の産業革命遺産　九州・山口と関連地域」の世界文化遺産への登録を目指す取り組みは、14年に産業遺産に関する世界的権威であるスチュアート・スミス氏が集成館を視察し、高く評価したことがきっかけである。17年には、鹿児島県が主催した「九州近代化産業遺産シンポジウム」において、学術的評価の推進等が「かごしま宣言」として取りまとめられ、九州地方知事会への取り組みへと発展していく。18年11月、鹿児島県、市など6県8市は、13の文化財からなる九州・山口の近代化産業遺産群のユネスコの世界文化遺産暫定一覧表入りを目指し、文化庁へ提案を行った。この時点において、鹿児島市からは、旧集成館、旧集成館機械工場、旧鹿児島紡績所技師館が構成資産に入っている。国内の暫定一覧表入りが決定した20年10月

には、関係自治体による世界遺産登録推進協議会が設置され、その事務局を務める鹿児島県には世界文化遺産登録推進室（後に世界文化遺産課）が新設された。

21年1月に、ユネスコの世界遺産暫定一覧表へ追加記載されたことを受け、鹿児島市では、寺山炭窯跡や関吉の疎水溝、疎水溝の集成館口などを「史跡　旧集成館」に追加指定するとともに、鹿児島紡績所跡を「史跡　鹿児島紡績所技師館（異人館）」に追加指定し、名称を「史跡　鹿児島紡績所跡」に改めるなど、資産の保全に万全を期すことになった。

また、九州・山口の近代化産業遺産群は、さらなる精査、検討を重ね、25年4月には岩手、静岡も含めた8県にまたがる資産で推薦書原案を国に提出し、名称も「明治日本の産業革命遺産　九州・山口と関連地域」に改められ、25年9月20日、国内推薦案件に正式決定した。

「明治日本の産業革命遺産　九州・山口と関連地域」は、日本の重工業分野（製鉄・鉄鋼、造船、石炭産業）において、西洋技術を移転し、急速な産業化を成し遂げた道程を示す遺産群であり、8県11市23資産で構成する。鹿児島市の構成資産は、旧集成館（旧集成館機械工場、旧鹿児島紡績所技師館を含む）、寺山炭窯跡、関吉の疎水溝である。

旧鹿児島紡績所技師館

26年1月には、ユネスコに推薦書を提出し、ユネスコの諮問機関であるイコモスの審査を受けた上で、27年6月ごろのユネスコ世界遺産委員会で審査され、登録の可否が決定される。

第三章　新聞・放送

Ⅰ　新聞・情報誌紙

新聞発行部数の伸びは平成に入ってから全国的に飽和状態に入った。日本新聞協会の資料によると、全国平均の1世帯当たり部数は1・26部だった平成元年ごろがピーク。鹿児島県は0・85部だったが、全国では最下位の普及率で、全国紙、地方紙を合わせた総発行部数も56万1千部余にすぎなかった。（第1表参照）新聞が知的インフラの構築を続け、市民の知る権利にこたえるため奮闘するなかで、情報メディアの多様化は加速していく。インターネットやモバイル機器の普及により、若者の活字離れは進み、過疎・高齢化の進展に伴って、新聞業界は部数減、広告収入の落ち込みという苦境にさらされた。4年に56万4千部を超えていた鹿児島県内の新聞の総発行部数は25年には約41万部まで減っている。

NIE

模索を続ける新聞界の地道な試みの一つがＮＩＥ（Newspaper in Education＝教育に新聞を）の取り組みだ。学校などで新聞を教材として活用することで、子どもたちの学習意欲を高め、生きる力をはぐくんでもらいたいとの願いを込めた活動で、米国で始まった。日本では昭和60年に開かれた新聞大会で提唱され、平成元年にはパイロット校（のちＮＩＥ実践校）を指定して学校に新聞を提供する制度がスタートした。鹿児島県では4年に教員らによる自主研究グループ（のち鹿児島県ＮＩＥ研究会）が結成され、7年5月に鹿児島県教育委員会と鹿児島市教育委員会などに県内に本社・支局を置く新聞・通信社が加わり、鹿児島県ＮＩ

E推進協議会が設立された。授業での実践や講演、記者の出前講座などを通じて読解力が向上、学習態度が変化するといったNIEの効果が報告されている。17年7月には鹿児島市で「第10回NIE全国大会」が開かれ、「広げよう深めようNIE～豊かな学びを求めて」をテーマに教育関係者と新聞人ら約800人が研さんを深めた。26年度は全国で568校、うち鹿児島県内は13校が指定校（鹿児島市内は宇宿小と福平中）となり、熱心に取り組んでいる。

県内の新聞、通信、テレビ12社の協力によるマスコミ論講座が17年10月、鹿児島大学法文学部で開講した。マスメディアの役割や報道の自由とプライバシーなどの問題を取り上げ、各社は適宜、記者らを派遣し、学生たちが情報を読み解く力や社会を見る目を養う手助けをしている。25年10月には鹿児島市で日本新聞協会主催の第66回新聞大会が開かれ、約400人が新聞のあり方や将来像について論議した。

南日本新聞　南日本新聞社は平成13年2月10日、創業の地・易居町地区から与次郎1丁目に移った。塔屋まで含め地上13階建てで延べ床面積は2万3114平方㍍、手狭だった旧社屋に比べると約2倍の広さになった。140億円近い総投資を強いられてもなお新社屋建設、

第1表　鹿児島市と県内の新聞購読状況の平成の推移

各年10月部数　ABC協会資料

		南日本	夕刊	朝日	西日本	日経	毎日	読売	鹿新報	その他	朝刊合計
元年	鹿児島県	365,417	30,197	40,644	5,655	20,570	23,065	42,916	41,812	21,817	561,956
4年	鹿児島県	380,377	29,045	36,410	5,438	18,849	19,864	39,055	41,303	22,778	564,074
	うち鹿児島市	140,266	27,378	15,209	1,142	10,868	5,955	12,648	5,061	95	191,244
15年	鹿児島県	404,519	23,933	28,398	2,921	17,936	13,050	34,109	—	23,678	524,601
	うち鹿児島市	147,154	27,257	13,253	878	10,320	4,213	11,361	—	174	187,353
25年	鹿児島県	334,368	—	22,265	1,116	15,251	3,762	32,929	—	112	410,857
	うち鹿児島市	131,161	—	10,766	429	9,071	1,342	11,074	—	-	164,381

※合計に夕刊は含まず。その他は南海日日（22年以降、公表停止）と産経（21年10月から配達）など

日経は日本経済、鹿新報は鹿児島新報、夕刊は南日本新聞夕刊（21年に休刊）の略

移転に踏み切らざるを得なかったのは、将来に向けての発行部数、建てページ、カラー紙面の増加をにらんでのことである。コンピューターを駆使した新聞作り、いわゆるＣＴＳは一段と機能を向上させ、オフセット輪転機は新型を２セット導入したことで40ページ（うち12面がカラー）発行が可能になった。新社屋には多目的に使える「みなみホール」や屋上庭園が設けられ、県民に開放された。当時の大囿純也社長は「双方向の新聞づくりのアンテナ、拠点づくりになれば」との願いを新しい生産ラインから刷りだされた紙面に記している。

鉛活字と決別させたＣＴＳは、４年にはコンピューター画面上での組み版へと突き進んだ。６年には画像まですべて処理できるようになり、業界の最高水準を行く総合新聞制作システムが自前で完成する。原稿も紙と鉛筆からワープロ、パソコン入力が主になっていった。一方で８・６豪雨災害の教訓はいざという時の備え、分散印刷のための拠点づくりを決断させた。11年２月に国分制作センター（霧島市）が稼働する。創刊１１５年、改題50年という節目の年の８年、発行部数はついに40万部の大台を突破した。その後、伸びは鈍化したものの、南日本新聞の県内占有率は10年に７割を超えた。「サツマイモ新世紀」や「平成茶考」「かごしま黒豚物語」「温泉新時代」「われら黒潮民族」な

南日本新聞会館

どで他県紙と共同で企画したものも少なくない。郷土紙の特色を発揮した多彩な連載や食料供給基地ならではの企画も多い。時代に合わせて多くの主催事業を展開するなか、50年を迎えた南日本美術展は記念展「留学生たちのパリ展」を7年6月に芸術の都・パリで開いた。地方紙としては極めて珍しい海外事業で、同年の新聞協会賞に輝いた。インターネットなどの普及による影響を最初にかぶったのが夕刊で、21年2月21日付で休刊に踏み切った。新聞を読む習慣が薄れた家庭、氾濫するデジタル情報は朝刊の部数も減少に転じさせ、いまや40万部を大きく割り込んだ。10年にはメディア開発局を発足させ、ホームページの充実やウェブを利用した情報発信、読者との交流にも尽力している。

鹿児島新報廃刊　鹿児島新報社は平成16年5月、自己破産を申請し5日付をもって廃刊した。負債総額は21億円、パートを含む従業員117人は全員解雇された。前日、城南町の本社に集められた社員にとっては突然の倒産通知だった。長年の赤字体質から脱しきれなかったうえ、岩崎産業グループが支援を打ち切ったことで、深刻な経営危機に陥ったうえ、業務上横領の訴訟が起きるなどの問題も抱えていた。ピーク時5万部を超えた部数も、末期は公称の3万部を割り込み、広告収入の落ち込みも激しかった。「受け皿企業を探したが、交渉は決裂して事業継続が困難になった」と鈴木了五社長は無念さをにじませた。鹿児島新報は昭和34年5月に、当時の「一県一紙体制への反発」を梃子（てこ）に県内経済界などが創刊した「鹿児島毎日新聞」が前身で、一面トップは必ず地元に関する記事を使うなど地域密着にこだわり、創刊45年を記念して10ページの特集号を出したばかりだった。南日本新聞と切磋琢磨（せっさたくま）しながら、県民の信頼を醸成してきた地元紙が一紙になり、元記者のなかには「NPO鹿児島新報」というグループを結成、ウェブ

サイト「みんなでネット鹿児島」からの情報発信が1年間ほど続けられた。管財物件となっていた城南町の跡地は全国労働者共済組合連合会が購入し、鹿児島本部会館を18年に建築した。

タウン誌・フリーペーパー　購買読者層を絞り込んで、地域に根ざした生活情報を提供するタウン誌には、斯文堂（新屋敷町）が発行する「ＴＪカゴシマ」や南日本出版（錦江町）の「ＬＥＡＰ」などがある。ともに月刊でＴＪカゴシマは20～30代の男女向けに昭和55年に創刊、グルメやレジャーなどの地域情報には定評がある。平成元年に創刊のＬＥＡＰは30代の女性を主軸にライフスタイルの向上を願って発信を続ける。月刊情報誌同士のネットワークを通じて共同取材・編集するといった動きも出てきた。

新たに登場した紙メディアには無料で配布されるフリーペーパーもある。小回りの利く広告中心の編集は、地方都市の商店や経営者にとって重宝する宣伝手段となっている。草分け的な存在は「リビングかごしま」で、南日本リビング新聞（泉町）が昭和57年に創刊し、女性のための生活情報紙を売りに、鹿児島市内だけで毎週約26万部を発行するまでになった。国分・隼人地区版も出しており、印刷物の戸別配達で業界初の国際認証ＩＳＯ９００１を取得している。平成９年には南日本新聞がエリアを絞った広告媒体として、フリーペーパー「フェリア」を創刊、朝刊購読者への配布を始めた。初めは月１回だったが、２年後には月２回になった。ほかにも25年現在、月刊で南日本出版の「Ｍｓ」（ミズ）、朝日印刷（上荒田町）の「Oh-gojo」（おごじょ＝26年１月休刊）、「ポス」（ポス鹿児島支社）などが独自のルートで配布している。

Ⅱ　放送

急速に進む情報化社会はテレビ、ラジオの世界さえ大きなうねりに巻き込んだ。鹿児島では民放の第４局が平成６年に開局し、エフエムやケーブルテレビの新局もでき、衛星放送が本格導入され、電波のデジタル化も進み、番組選択の幅がぐんと広がった。鹿児島市のテレビ受信契約数は元年度に16万17件（うち衛星放送契約６５７５件）だったのが、10年度は17万２０４５件（同４万５０８３件）、22年度には20万３９５７件（同７万５３８７件）と20万件の大台を超えた。とはいえ、競争相手も増えた。急激なインターネットや携帯電話などの普及に伴って、テレビの視聴時間は減少傾向にある。放送法によって各放送局に設置が義務付けられた番組審議会は９年の同法の一部改正で、審議概要の公表と答申への対応が義務付けられた。形骸化を防ぐ狙いである。

民放４局時代

テレビ局　県民待望の第４局の誕生だったが、各放送局にとってはバブル崩壊後の不況下における４局時代をどう乗り切るか、模索が始まった年となった。チャンネルは増えても全体の広告費が格段に増えるわけではなく、局同士、あるいは他メディアとの競合によって視聴率が分散化する一方で広告収入は減少するという冬の時代の到来である。一方、それまで特定のキー局に限定せず、複数の局から番組を選択して編成するクロスネットワークが解消したことで、系列局がすっきりし、キー局のカラーが鮮明に出るようになった。その半面、いかに違いを出すかが、重要となった。各局それぞれに自主制作番組や主催イベントに力を入れたのもその表れで、ニュース時間帯などに、いかに、どんなタイミングで独自色のある地元ニュースを盛り

込むかで知恵を競い、地域の情報提供にも一段と力を入れるようになった。平成5年の8・6豪雨災害では各局が地元局としての責任感を前面に出して報道と検証を行った。

鹿児島読売テレビ（KYT）

「受信機会の増大」を理由に昭和61年、郵政省（当時）が鹿児島県に電波を割り当てた後、免許申請が殺到した。締め切り時点では227社から申請が出されて、審査、調整は難航した。ダミーを排除した上で一本化がまとまったのは平成4年10月である。日本テレビ放送網、南国殖産、読売テレビ放送が主要株主となり、資本金35億円で会社設立し、初代社長には上野喜一郎・南国殖産社長（当時）が就任し、鹿児島読売テレビ（KYT）が誕生した。与次郎1丁目に本社を建設し、NNN―日本テレビ系列のフルネット局として6年4月から本放送を開始した。県内4番目の民間テレビ放送局の誕生により、在京キー局がそろったことで、番組選択の幅は広がった。全国高校サッカー選手権がリアルタイムで見られるようになったのはその一例だ。KYTの送信はKTSの紫原テレビ塔を共同使用している。後発ゆえ当初、中継局は先発局に比べれば少なかったが、11年に与論局が完成したことで、ほぼ県内全域をカバーできるようになった。他社に比べ、社員数が少ないため、自社制作番組はまだニュース中心になっているのは否めない。とはいえ、19年には「志布志事件をめぐる一連の報道」で第44回ギャラクシー賞報道活動部門の大賞を受けた。

鹿児島読売テレビ

地上デジタル

平成９年、郵政省（当時）はデジタル衛星放送に続いて、地上放送のデジタル化に向けた取り組みを検討課題に掲げた。電波障害に強く、高画質・高音質でデータ放送や双方向番組ができてチャンネルも増やせると機運は高まったが、鹿児島のローカル局にとっては地上デジタル放送（以下地デジ）への切り替えは大きな難題となった。離島と複雑に連なる山間部を抱えた県域をカバーするには全国平均の2倍の中継所を建てなければならないという宿命を背負っているからである。必然的に電波過密に伴う干渉も発生しがちだった。送受信設備や機器を更新するため、膨大な投資を迫られ、鹿児島だと40億円以上を要し、放送局を新たに一つ造るぐらいとも言われた。県内の各放送局は送信所や中継局の適地を調べ直して、共同利用するなどしてコスト削減に努める。曲折はあったが、世界の潮流に後れまいとする総務省は「環境の整ったところから順次、地デジに移行する」と表明した。鹿児島では18年12月、鹿児島湾岸の約31万世帯（県内世帯の43％）を対象に、テレビ新時代が幕を開けた。その後、各局は離島などの中継局も整備し、連携して普及啓発に努めた。受信者の側も地デジ対応テレビやチューナーの準備が必要となり、買い替えの特需も起きるなか、アナログを停波し、地デジに完全移行したのは23年7月24日午前零時だった。22年末の地デジ対応受像機の県内世帯普及率は92・3％で、数多くの世帯に精細な電波が届けられるようになったが、共聴システムや衛星放送に頼るしかない難視聴地域がなお残るのも事実である。

日本放送協会（NHK）

昭和11年に天保山にできたNHK鹿児島放送局は平成18年10月、本港新町に新築移転した。老朽化に加えて手狭で、地上デジタル放送化に対応するのも難しかったという。本港区中央ゾーンの県有地を購入し、建設された新放送会館は地上４階建てで延べ床面積が５５００平方㍍。ウオーターフロント地区の情報文化施

設にとの期待にもこたえようと、市民が自由に出入りできる展望広場、桜島を背景にしたサテライトスタジオを設けたほか、昔の映像を視聴できるＮＨＫアーカイブスコーナー、キッズコーナーなど親しみやすく開かれた建物となった。その陰で44年間にわたってラジオやテレビの電波を送信し続け、天保山のシンボルと親しまれてきた高さ38㍍の鉄塔は解体撤去された。鹿児島放送局制作の番組には、かごしま熱風録、かごしま大作戦などがあり、16年には地域の音楽文化への貢献と青少年の健全育成のため、ＮＨＫ鹿児島児童合唱団が結成された。

NHK鹿児島会館

南日本放送（ＭＢＣ）

昭和28年に開局したＭＢＣ（高麗町）は、午後７時以降のゴールデンタイムといわれる時間帯に自社制作番組をという長年の悲願を、59年10月スタートの「どーんと鹿児島」でかなえた。ネット局の番組を優先せざるを得ないのがローカル局の宿命ともいわれるなかでの挑戦だった。最初は午後10時スタートだったが、平成２年には午後８時に変わった。鹿児島の関心事をじっくり取り上げるスタイルは「どんかご」と親しまれ、地域エンターテイメント番組「てゲてゲ」などにも受け継がれている。平成５年の開局40周年ではサッチャー前英国首相を招いてスーパーフォーラムを開催するなど記念番組を制作、民間放送連盟賞４部門で優秀賞に輝き、花を添えた。８・６豪雨災害ではキー局（ＪＮＮ―ＴＢＳ）のドラマを途中で打ち切り、通常放送終了後は翌朝まで報道を続けた。ＭＢＣラジオは安否確認、災害情報

に特化して市民にラジオの威力を再認識させた。その姿勢は「二〇世紀放送史」（日本放送協会編）に特記されるほどだった。災害防止への思いは7年、独自に情報を提供する日本の放送局初の「気象予報業務」を開始するまでになった。9年から9年間続いたドキュメンタリー「陶山賢治の時の風」は先発民放ならではの底力を示した。奄美の本土復帰はＭＢＣの歩みとも重なり、復帰50周年では特別番組を生中継するなど力を入れた。局の枠を広げた連携・協力体制の構築も進み、屋久島の世界遺産登録ではＭＢＣはＮＨＫと4年、6年と共催シンポジウムを開き、機運の盛り上げに一役買った。25年の開局60周年では県内外の有名人による感謝の夕べを開き、ＭＢＣ夏祭りは回を重ねて市民に親しまれる行事に育った。

鹿児島テレビ放送（ＫＴＳ）

昭和44年に紫原6丁目に開局したＫＴＳは、初め日本テレビとフジテレビ、テレビ朝日（現在）の3系列のクロスネットで番組を編成していたが、後発局の参入によって平成6年からはＦＮＮ―フジテレビ系列のフルネット局となった。開局当初からニュースやトーク番組、特別番組を中心に自社制作にも意欲的に取り組んできたが、平成2年5月に始まった女性のための女性スタッフによる生放送「ナマ・イキＶＯＩＣＥ」は人気情報番組に育ち、13年に放送ウーマン賞を受け、22年にはローカル局として地域密着の活動を20年間続けたことに対してギャラクシー大賞（報道活動部門）に輝いた。深夜に放送した「ぱじゃま倶楽部」は若い音楽ファンを引き付けた。5年の開局25周年では海外ロケを行い特別番組「バスクの熱き魂」でザビエルに随行した2人の薩摩人の足跡を追った。その後に制作されたドキュメンタリーの題材は、消えた石橋群や、日露辞書を出したゴンザ、ハンセン病、ドミニカ移民など地域の関心事を取り上げ、さまざまな賞に輝くとともに、全国に向け発信されることにもなった。20年の開局40周年特番は「南洲翁異聞」と、難病と闘いな

から画用紙に向かった少年を取り上げた「ママとぼくと信作と」を放送した。24年にスタートした地域密着型の生活情報番組「ゆうテレ」は午後4時という新たな時間帯を開拓している。ＭＢＣ同様に、ＫＴＳは歳月と経験を重ねるなかで育てたタレントを数多く抱え、地域文化の情報発信役を担えるようになったのは先発局の強みといえる。「ＫＴＳの日」やマーチングフェスティバルなどの催しは市民に定着し、18年からは鹿児島市などと共催で「すこやかふれあいフェスティバル」も開いている。

鹿児島放送（ＫＫＢ）

昭和57年、与次郎2丁目にＡＮＮ―テレビ朝日をキー局に開局したＫＫＢは、県内民放の系列化に弾みをつけた。県内3番目の民放として、系列局と共存共栄を図りながら、地域密着・地域貢献に努めてきた。その一つとして開局翌年から続く全国高校野球鹿児島県大会の全試合中継があり、13年から始めた「ふるさとＣＭ大賞」がある。平成24年には、年間視聴率がゴールデンタイムなど3つの放送時間帯で鹿児島地区の1位を初めて獲得した。25年の開局30周年記念では「夢かごしま応援宣言」と題して7時間半の生中継に挑戦するとともに「海の道が結ぶ自然遺産」と題して屋久島、奄美大島を取り上げて全国放送もされた。九州新幹線の部分開業では列車内からを含めて8元生中継も試みた。土曜日朝の「かごしま農業王国」や「ぷらナビ」などの自社制作番組はしっかり定着してきた。「アマンダが島に来た日」は平成3年に動物愛護映画コンクールの文部大臣賞を受けた。20年まで開かれたＫＫＢのこども博は23回の合計で２１４万人の親子を楽しませた。

エフエム　平成4年10月、鹿児島で初めて民放ＦＭ局・エフエム鹿児島が東千石町の鹿児島商工会議所ビル内に開局した。３００を超す免許申請者の一本化や役員人事に手間取り、周波数割り当てから8年を要したため、全国で40番目、九州では最後の開局となった。南国殖産や鹿児島テレビ放送などを主要株主に、資

本金8千万円で同年2月に会社設立した。FM波の特性を生かして鹿児島のラジオ文化発展の起爆剤にと期待され、JFN系列としてキー局から提供される音楽番組を中心にした編成で24時間放送する。エリアは鹿児島県となっているが、中継局がない奄美では聴取ができない。

9年10月には鹿児島市を中心にした地域密着型コミュニティFMとして、鹿児島シティエフエムが東千石町に開局した。その後、下荒田1丁目に移転した。4年の放送法一部改正で制度化されたコミュニティ放送局で、エリアは市町村の一部地域に限られる。資本金は1億5千万円で、鹿児島テレビ放送や鹿児島市など31社・団体が出資した。消防局の協力で防災放送に力を注ぐなど自主制作を柱に据えたのが特徴である。スーパーバイザー・非常勤取締役として音楽家・藤井フミヤ氏を委嘱して話題を呼んだ。

ケーブルテレビ　共同アンテナ設備で受信した放送をケーブルを通して配信するケーブルテレビ局（CATV）は難視聴地域解消を目的に始まったが、昭和50年代後半から都市部にも広がり、コミュニティチャンネルやインターネット接続の役割も果たすようになった。鹿児島市では南国地所が57年、アンテナのない街並みを売り物に皇徳寺ニュータウンで住民から維持管理費を徴収してCATV事業を始めた。平成20年10月からは皇徳寺ケーブルテレビとして皇徳寺団地と星ケ峯みなみ台周辺で放送を提供している。上野城グループの鹿児島ケーブルテレビ放送は8年に認可を受け、西陵3丁目で配信を始めたが、加入者の伸び悩みから15年に破産した。その後は都城市を本拠とするBTVケーブルテレビが清算会社から事業を引き継ぎ、鹿児島市西部の3千世帯を対象にサービスを提供している。

第四章　宗　教

教義を広め、儀式行事を行い、信者を教化育成することを主目的とする「宗教団体」は文部科学大臣もしくは都道府県知事の認証を経て法人格を取得する。ただ、中には法人格を得ない宗教団体もあり、把握はしづらい。戦後、宗教法人の設立が届出制になると、新たな宗教団体ができる一方で、既存の宗教団体の中でも分派、独立が盛んになり、巨大化した教団も少なくない。

文化庁の宗教統計調査によると、平成23年12月31日現在、鹿児島県内で活動する宗教団体は（宗教法人を含む）神社１１３５、寺院４８５、教会３３８、布教所２７３、その他87の合計２３１８ある。これを系統別に大別すると神道系１２５５、仏教系５３６、キリスト教系２０９、諸教３１８となる。宗教法人に限れば、神道系１１７８、仏教系４６５、キリスト教系54、諸教１２７の計１８２４が県内に拠点を持つが、他都道府県にまたがって活動するため、文部科学大臣所轄となる包括宗教法人や非包括宗教法人が含まれている。知事所轄分だけの宗教法人に限ると１８１７となり、そのほとんどを宗派、教派、教団の傘下にある非包括法人が占める。平成元年の県知事所轄法人数は１８３８だったのでわずかに減った。鹿児島市内に限っても同様で、神道系が特に増えたのは16年の合併に伴い、５町に散在する多くの神社が鹿児島市に含まれるようになったためである。（第１表参照。以下、鹿児島市内の宗教法人数は25年10月１日現在の県学事法制課のまとめに基づく）

第１表　鹿児島市内の宗教法人
（平成の推移・知事所轄分）

	元年	13年	25年
神道系	95	95	148
仏教系	48	54	67
キリスト教	14	11	15
諸教	39	38	36
総数	196	198	266

戦後、日本ではさまざま宗教がその垣根を越えて協同する宗教協力が盛んになり、日本宗教者連盟も結成された。昭和45年には初めての世界宗教者平和会議（ＷＣＲＰ）が海外からも聖職者を招いて京都であった。平成18年には第８回の会議が再び日本で開かれた。鹿児島県内の各宗教者はＷＣＲＰに呼応して22年、アームズダウン（核兵器廃絶軍縮と世界の貧困撲滅）のための署名活動に取り組んだ。人類の福祉と世界平和という崇高なる願いに対しては、宗教、宗派を超えて共に協力し合えるということを実証した。この活動を通じて宗教者同士の信頼が醸成されたことで、人々の共生と平和を希求して、共に祈り、願おうという機運が盛り上がり、23年４月には、神道、仏教、キリスト教、諸教などを横断する78人が賛同して、鹿児島県宗教者懇話会が結成された。会は、人々の苦悩に正面から立ち向かい、相互信頼と学習を重ねて、可能なところから協力し、行動することを理念に掲げ、平和のための募金活動などを行っている。お互いの宗教を認め合うことからきずなを深め合おうと、毎年、各宗教を順繰りに正式参拝する「平和のつどい」を行い、24年には鹿児島大学で学生向けの宗教学講座を始めた。

１　神道と神社

日本民族に固有の神や神霊への信念から発生し、広まった神道は、神社を中心とした神社神道と幕末以降に創設された教派神道に大別される。特定の創唱者らを中心にした信者が集まった組織宗教である教派神道は教派神道系と新教派系（明治時代に公認された教派神道13派とその系譜をひくもの以外で成立したもの）に分類される。鹿児島市内には神道系宗教法人は１４８ある。うち教派神道系は、神道天行居、扶桑教が各

1、御嶽教5、金光教3、金毘羅教5あり、新教派系が天真道教団1、皇教本院派が3となっている。ほかに単立が6ある。

鹿児島市内の神道系宗教法人のうち123法人が神社神道系の神社本庁に属している。戦後、全国の神社の総意によって設立されたのが神社本庁で、その地方機関が鹿児島県神社庁であり、鹿児島支部を八坂神社（清水町）に置く。八坂神社は平之町にあったが、手狭になったうえ、交通混雑も激しくなったため、発祥の地である清水町に社殿を新築し、平成元年4月に御霊を移した。敷地は2倍になり、おぎおんさあ（祇園祭り）の準備にも支障がなくなった。祇園祭りは24年に鹿児島市指定の無形民俗文化財になった。例祭日に立つ諏訪市でにぎわう南方神社（清水町）と稲荷神社（稲荷町）も平成になって改築された。南方、八坂、稲荷の3社に若宮神社（池之上町）、春日神社（春日町）を加えて、鹿児島五社と呼ばれ、藩政時代から崇敬を集めている。また島津家当主は代々、元旦には一之宮神社（郡元2丁目）、二之宮（現鹿児島神社＝草牟田2丁目）、三之宮（現川上天満宮＝川上町）を巡拝する習わしだった。藩主・島津斉彬を祭神とする照国神社（照国町）の六月灯は県内最大の人出約10万人でにぎわう。御鎮座130年の6年には幣殿の拡張などを行った。照国神社の創建を祝って近衛家から贈られたものの、西南戦争で行方不明となっていた儀礼用の日本刀が24年、134年ぶりに戻り、境内の記念館に展示された。官軍に奪われたというが、21年に日本美術刀剣保存協会（東京都）で見つかり、返還された。

戊辰の役以降の殉国戦死者約7万8千柱を祭る鹿児島県護国神社（草牟田2丁目）は、11年の創建130年を機に鉄筋3階建ての社務所を新築、10月に落成式を行った。最大300人が入る参集殿やお茶室など備

えている。25年6月には境内に、鹿児島県沖縄戦没者慰霊会が慰霊碑を建立した。遺族らの高齢化が進んだため、沖縄まで出向くのは負担になるとして会費や寄付金でまかなった。石碑には沖縄戦で亡くなった県出身者2927人の名前が刻まれている。荒田八幡宮（下荒田2丁目）は8年に大鳥居、14年に社務所を造った。月讀神社（桜島横山町）は12年に社殿を改築、若宮神社（東桜島町）は町の中心部に移築された。

西郷隆盛をはじめとする西南戦争の薩軍戦没者6800柱を祭る南洲神社（上竜尾町）では、翁の遺徳をしのんで9月の例祭日にセゴドンのエンコが行われている。松原神社（松原町）では殉死した島津家家臣にちなみ、毎年6月4日に歯の感謝祭が催されている。島津家歴代藩主とその家族を祭る鶴嶺神社（吉野町）の境内は旧集成館の一部として国指定の史跡に含まれる。花尾神社（花尾町）の権現造りの社殿は、格子天井に極彩色の草花の絵約400枚が描かれていることなどから「さつま日光」とたたえられる。本殿などは県指定の有形文化財である。このほか市内には磯天神と呼ばれて受験生らの祈願でにぎわう菅原神社（吉野町）があり、武岡トンネルの上に鎮座する建部神社（武3丁目）もよく知られている。

文部科学大臣所轄の神道系の宗教法人では金毘羅教や維神教、神慈秀明会、ワールドメイトなども鹿児島に拠点を持つ。

Ⅱ　仏教と寺院

昭和14年に宗教団体法が成立したとき、それまでに公認されていた仏教の13宗26派は28宗派にまとめられた。戦争が終わり、国の認可制度がなくなると、多くの仏教教団が分派・独立してたくさんの宗派が新設さ

れた。平成22年末では文部科学大臣所轄の包括宗教法人だけで１５６の仏教宗派が存在する。鹿児島市内の県知事所轄の仏教系宗教法人は67ある。内訳は真言系の高野山真言宗2、真言宗御室派1、中山身語正宗が7で、浄土系が浄土宗2、浄土真宗本願寺派12、真宗大谷派13、真宗興正派3、真宗仏光寺派1、真宗木辺派4、時宗1で、禅系が臨済宗相国寺派4、曹洞宗2あり、日蓮系が日蓮宗1、日蓮正宗1、法華宗（本門流）2となっており、ほかに単立で直指庵や大谷本覚寺など10を数える。

藩政時代の徹底した浄土真宗禁制と明治初めの廃仏毀釈によって、仏教空白地域となった鹿児島では明治9年に禁制がとかれると、一変して念仏信仰が広まった。特に浄土真宗の浸透は著しく、真宗王国とも呼ばれるまでになる。昭和60年、県内の真宗系の宗派は靖国神社法案や部落解放問題などにいかに対応するかをともに考え、発信していこうと真宗教団連合鹿児島支部を結成した。浄土真宗本願寺派、真宗大谷派、真宗高田派、真宗仏光寺派、真宗興正派、真宗木辺派の6派、３０９寺院が結集していて、県内にある四つの各宗派の別院を毎年順繰りに回る報恩講を行い、公開講演会などを開いている。教団連合結成40周年を控えた平成23年には、僧侶でありアナウンサーでもある川村妙慶氏を京都から講師に招いた。浄土真宗の開祖・親鸞の７５０回忌に当たる25年は、真宗教団連合としても、各宗派ごとでも多彩なイベントを行った。西本願寺鹿児島別院（東千石町）では「ボーズ・ミーツフェス」があり、芸人によるおもしろ仏教講座などでにぎわい、県内のかくれ念仏のパネル展も開かれた。東本願寺鹿児島別院（新町）では伊佐市出身の漫画家・井上雄彦氏が描いた親鸞の巨大屏風が展示され、若い人もたくさん訪れた。東本願寺別院では東北大震災の際は大災害追弔会も開かれた。西本願寺別院の屋根瓦４万枚は24年に軽量で耐久性に優れたチタン製にふき替

えられた。県内の大規模建築物では初めてという。

真宗系以外の主要な寺院では時宗・浄光明寺（上竜尾町）や臨済宗相国寺派・南洲寺（南林寺町）、節分の水行で知られる日蓮宗・教王寺（松原町）、曹洞宗・大中寺（西千石町）、高野山真言宗・最大乗院（長田町）などがある。うち、南洲寺境内には平成元年10月、千利休の兄弟弟子で野の茶人として知られ、諸国をさすらった末、薩摩で没した丿桓（へちかん）の碑が県内の茶同好者らによって建てられた。また平安後期（12世紀）の作で、県内最古の木像の一つとされる不動明王立像は傷みが激しかったが、20年に修復を終え、南洲寺境内に安置されている。大中寺には薩摩義士の墓がある。岐阜県養老町にあった墓が昭和34年の風水害で埋没した際、分骨して鹿児島に連れ帰ったことに由来する。平成6年に、鹿児島県薩摩義士顕彰会が篤志を集めて大中寺に墓を建立し供養を続けている。著名人が護摩行に訪れることで知られる最福寺（平川町）には12年、高さ18・5㍍の木彫りでは世界最大級の弁財天とそれを収める大仏殿が造られた。

仏教系の文部科学大臣所轄の宗教法人では、立正佼成会が鹿児島教会（東郡元町）を設けて26年で55周年を迎えた。創価学会は鹿児島での活動の中核となる鹿児島文化会館（南栄1丁目）が手狭になったため、平成9年に増築した。平和の文化と女性展、アンネフランクとホロコースト展など、平和を守るための発信にもほぼ毎年、取り組んでいる。幸福の科学は鹿児島中央支部精舎（新屋敷町）が21年に完成、鹿児島北と鹿児島南の3支部で布教に励む。ほかに真如苑（吉野町）や霊法会（坂元町）も活動拠点を持ち、本薫寺（原良町）などもある。

Ⅲ　キリスト教と教会

鹿児島市内の県知事所轄のキリスト教の宗教法人は旧教がカトリック鹿児島司教区（包括法人）と日本ハリストス正教会教団が各1、新教の日本基督（キリスト）教団2、日本福音ルーテル教会、日本バプテスト連盟、イエス之御霊教会教団、日本フォースクェア福音教団が各1あり、ほかに単立が7の合計15となっている。

フランシスコ・ザビエルが来航してから450周年になる平成11年、鹿児島市で記念ミサなどさまざまな催しがあり、伝道の労苦と業績をしのび、信仰を誓い合った。記念事業として鉄筋コンクリート3階建てで延べ床面積1330平方㍍ある鹿児島カテドラル・ザビエル記念聖堂（照国町）が新しく建てられた。外観は大航海時代の交易船を模している。高さ30㍍の鐘楼や顕彰記念室を備え、ステンドグラスが荘厳さを醸す。9月に聖堂完成を祝う献堂式があり、10月には祝賀の宗教音楽祭が開かれた。700人を収容する聖堂にはパイプオルガンが備えられたこともあり、音楽会などで信者以外にも利用される開かれた教会になっている。カテドラルとは司教座を意

鹿児島カテドラル・ザビエル記念聖堂

味しており、ザビエル教会はカトリック鹿児島司教区の核となる教会である。鹿児島が知教区から司教区に昇格したのは昭和30年で、昇格50周年となる平成17年には、ミサで小教区の活性化と教区のさらなる一体化を訴えた。ちなみに聖堂が新築されるまでザビエル教会として親しまれた木造の旧聖堂は解体されたが、文化財的価値を惜しむ声が広がり、寄付などによって25年11月に福岡県・宗像市でよみがえった。

ザビエル４５０周年記念行事の目玉になったのは50年ぶりに来鹿したザビエルの聖腕で、記念聖堂にはローマの教会から帰ってきた右腕を一目見ようと、信者や市民らが列を作った。10月に鹿児島アリーナであった記念ミサにはローマからの教皇特使をはじめ、全国から５６００人余が集まり荘厳に行われた。記念行事は国際シンポジウムやオペラ「カルメン」の上演があり、鹿児島本港区の広場では鹿児島・スペイン・ポルトガルの観光物産展「ザビエル４５０フェスタ」も開かれた。大勢の市民がポルトガル生まれの大衆歌謡ファドに聴き入り、大なべでつくられたスペインの名物料理パエリアが人気を呼んだ。翌12年10月には、民間の上陸顕彰会の発案で建立資金を募り、ザビエルと、布教に協力した鹿児島の青年ヤジロウとベルナルドの立像がザビエル公園（東千石町）に設置された。

ギリシア正教の流れをくむ日本ハリストス正教会は、築45年になった平之町の鹿児島聖堂を平成14年に全面改築した。キリストの12弟子の名前から聖使徒イアコフ（ヤコブ）聖堂と呼ばれる。プロテスタント系では、日本基督教団が鹿児島教会（上之園町）と加治屋町教会（加治屋町）を拠点に活動し、日本バプテスト連盟の鹿児島教会（鴨池２丁目）は26年に併設する幼稚園を新築した。ほかに日本福音ルーテル教会の鹿児島教会（荒田１丁目）や日本ホーリネス教団の鹿児島武教会（武３丁目）などもある。

キリスト教系の文部科学大臣所轄の宗教法人では万国デフ・パブテスト福音伝道教会（永吉2丁目）、カトリック贖罪主修道会（東谷山2丁目）も活動している。

Ⅳ　諸教

神道系、仏教系、キリスト教系のいずれとも特定できない諸宗教団体は諸教に分類される。もとは教派神道系であった天理教は自らの教団が神道でないことを表明したため、諸教に含まれるようになった。鹿児島市内には県知事所轄の諸教の宗教法人は36あり、うち天理教が30を占める。ほかに生長の家が1、救世主教が2、単立が3あり、布教に努めている。

諸教のうち文部科学大臣が所轄する宗教法人ではパーフェクトリバティー（ＰＬ）教団や世界救世教（いづめの教団、東方之光、主之光教団）、崇教真光教、世界真光文明教団、ＧＬＡなどが鹿児島市に支部や道場といった施設を持ち、教義を広めている。

参考文献・資料　「鹿児島県文化年鑑」、「かごしま文庫」、「鹿児島市文化協会40周年記念誌」、「南日本新聞の１２０年」、「ＭＢＣ50年の軌跡」、「ＫＴＳ38年のあゆみ」、「鹿児島放送30年のあゆみ」、「宗教年鑑」。その他、各団体ＨＰ